



10 Years Letter

～10年後のあなたへ～

mixiコミュニティ『創作が好きだよ!』
テーマ企画『10 Years Letter』参加作品集

↳
10
Y
e
a
r
s
L
e
t
t
e
r
↳

冒頭に寄せて

そう、さく「サウ」【創作】

1 新しいものをつくり出すこと。
2 文学・絵画などの芸術を独創的につくり出すこと。また、その作品。

3 つくりごと。うそ。

そうさくぶつ【創作物】

1 創作されたもの。特に、芸術作品にいう。
2 人の知的創作活動の産物の総称。著作物・発明品・実用新案・意匠・商標など。

『創作』活動を至上の喜びとする作家が居る。そのような作家たちのコミュニケーションの場を提供したいと開設されたのが、Mixi内のコミュニティ『創作が好きだよ！』である。

10年前。ある新規参入の通信業者が会社創立を記念して、ある企画を立ち上げた。

それは、限定20名の日本人を対象にした企画。

『10年後のあなたへ、手紙を送ってみませんか？』

というものだった。

むろん、10年も経てば、人はその人生を大きく様変わりさせていることがおおく、同じ場所に住んでいる可能性も低い。通信業者はそれを踏まえたうえで、『10年間対象者の住所を把握し、確実に10年後に対象者のもとに手紙を送る』ことを約束したのである。

応募の仕方は非常に簡単。手紙を同封した封書を、所定の送付先に郵送するだけだった。

この企画に応募をした日本人は、およそ10万人。その中から抽選で20名が選ばれ、新聞各紙においてその氏名が公表されることとなった。

それから10年後の今年。選ばれた20名のもとに、それぞれが出した手紙が届く。

海外に転居したもの。

結婚し家庭を持ったもの。

事故などによって他界したもの。

同じ所にいまだ住み続けているもの。

これは、それぞれにそれぞれの人生を送っていた20名の日本人が、自らの手紙を通して体験した物語である。

失礼致します。当書籍の編集人であり、この企画の発起人であり、す、榎崎六呂と申します。

先述ののあらすじにある通り、今回の企画はいわゆる『シチュエーション企画』となります。今回この企画において指定させていただいたのは、以下のとおりです。

①主人公は『10年前に自分（もしくは近親者）が書いた手紙』を受け取ってください。決して『10年後の自分に手紙を送る話』は書かないようにご注意ください。

②主人公は日本人でおねがいします。生死は問いません。

③『手紙』の形式にこだらなくても良いです。今回は『手紙』を募集しているわけではありませんので、手紙の内容に無理に言及する必要はありません。手紙はあくまで物語における『小道具』として

使っていたただければよいです。

この指定をクリアした作品について、今回は作品集という形で掲載しております。

それぞれの作家さんが、それぞれの持ち味を活かしつつ産み出したその作品たちによって、読んだ皆さまの心のなかに何か残るものが有りましたら幸いです。

M i x i コミュニティ 『創作が好き！』副管理人

およびイベント企画立案者

檜崎 六呂（かーる）

前書き

『危ない、振り返っちゃ駄目！』	(葉月たまの著)	……	P 2
『手紙を受け取れ！この野郎！』	(宇瑠璃春花著)	……	P 8
『その手紙は読まないで！』		……	P 16
『魔皇帝十年前からの刺客』	(海見みみみ著)	……	P 32
『そして10年が過ぎた』	(へくとばすかる著)	……	P 57
『コイ×ソラ』	(檜崎六呂著)	……	P 69
『過去からの告発』	(流民 著)	……	P 108
『手紙よりも』 (番外編)	(宇瑠璃春花著)	……	P 123
『ノート』	(檜崎六呂著)	……	P 131
『不誠実で素敵な恋』	(海見みみみ著)	……	P 161
『Passage』	(雪月音弥著)	……	P 177
『空を見上げる』	(宇瑠璃春花著)	……	P 195
著者紹介及びあと書き		……	P 209

『危ない、振り返っちゃ駄目！』

（葉月たまの著）

あたしは勉強が好きだ。しかし成績は悪い。いや、違う、高校生にしては平坦な成績だ。せいぜい並みの並みくらいである。

容姿は至って平凡。スタイルも平凡。

でも、恋愛経験は豊富。幼稚園のときから、A君好きー、とか、B先輩大好きとか言っていてアタックしまくり、そのうち何度かは実った。でも、今は独り身であることから、全ての恋がもう終わったものだということは察してくれるだろう。

そもそも恋に恋する年頃なんて、あたしにはもう終わったのよ！あたしの高校生活はこれからは恋愛以外のことで生きて行く！

それは何か！ それは部活！ と思って部活に色々入ったけど、あれもこれも入りすぎて、頭も身体も付いていかない！ そろそろ部活、どれかひとつに絞った方がいいのかなあ？

そもそもあたしが勉強好きなのに、成績が平凡なもの、この散漫さんまんな性格のせいにある！ 色々なことをしすぎて、勉強する時間が足りない！

あたしはあらゆることをしてみたいのだ。あらゆることを体験してみたいのだ。でも、急ぎ流れ行く時間がそれを許してくれない。

時々、ネガな感情になったとき、ふと思う。あたしは何がしたいのだろうか？ 何になりたいのだろうか？

答え、あらゆることをしたい！

否、それは不可能だ！

たったひとつ、たったひとつだけ、これをしてほしい、ということが、あたしは見つからずにいる。

そんな風にネガにたまーになるけど、でも、あたしは基本、色々なことを試してみて、色々なことをやっぱり自分に向いてない、と諦あきらめていく性格である。

諦あきらめる必要なんてないのかもしいけど、でも、何かを削けずらな

いと別の新しいことを試してみることができない。だから、今まで続けてきたことを、仕方なく諦めていくのだ。

そんなとき、キャピタル・テクニカルサービス社のCMを見た。10

年後の自分に今の自分からのメッセージを届けてくれる、というサー
ビス。

あたしだったら、10年後の自分に、未来の自分に、どんなメッセー
ジを送るだろう……？

未来の自分も、もしかしたら、今のあたしみたいにひたすら只管、もがいて
いるのかもしれない。たったひとつのやりたいことが見つからず、じ
たばたあがいているのかもしれない。それとも、既にたったひとつの
したいことを見つけ、夢に向かって一直線に前進しているのかもしれ
ない。そうだといいな。

あたしは未来の自分に問いかけを送ろうとは思わない。その代わり
に未来の自分にメールを送ろう。応援メッセージを送ろう。

そう思って、この手紙をあたしは書き始めたのだ。

未来の自分、これを読む頃には今あなたは27歳のはずです。高校生のあたしは今、アグレッシブに生きてます。全力で迷走しています。

未来の自分もきつとアグレッシブに生きてることでしょう。あたしはそんなあなたを応援しています。

未来のあたしを今のあたしは肯定こうていします。

だから……未来と今、今と過去、あたし同士、一緒にこれからもアグレッシブに生きていこうね！

タイトル驚いた？ちよっとしたあたしの悪戯いたずら心だよ。

でも、過去を振り返るよりは、未来のあたしには前に進み続けて欲しいんだ。

猪突ちよとつ猛進もうしんに運命を突き破れー！

10年たっても自分を変わず愛し続けるであろう10年前の望月依子より

あたしは、キャピタル・テニクカルサービス社に手紙を出しに行つた。

このたった今書いた手紙を、送ってもらおうつもりだった。

「あー、すみません。この手紙なんですけど……？」

あたしは真新しい便箋びんせんを差し出す。すると受付の人はにっこりと微笑ほほえみみかけてくれた。

「はい、どのようなご用件でしょう？」

「この手紙、10年後のあたしに届けてくださるでしょうか？」

「はい、いいですよ。じゃあ、お名前と現住所をここに記載きざいしてくださいね？」

あたしは言われた通りに、書類に名前とかを書いていく。その名前を見て、受付さんはハツとしたように、あたしの顔をまじまじ見つめた。それから、奥のカウンターへと、下がっていった。

一体、どうしたんだろ？

直ぐに受付さんは古びた手紙を持って、あたしの前に帰ってきた。

「大阪府〇〇町在住の望月依子さんですよね？」

「はい……？」

「これ、10年前のあなたより、お手紙です」

「えっ？」

あたしはぽかーんとした。10年前のあたし、自分にメッセージなんて書いてたっけ？

10年前と言えばあたしが7歳のとき、すっかり忘れてたよ！

メッセージ、メッセージ……。

あたしはメッセージを読んだ。

10年前のあたしは、今のあたしと同じだった。

あたしはやっぱり、いつまでたってもあたしのままだ。

受付さんが不思議そうに聞いてくる。

「……あの、どうされましたか？」

「いえ、おかしかつたものですから」

あたしは笑いを何とか止めようと努力しながら言った。

7歳のあたしも17歳のあたしも、あたしは悔いのない人生を生きた。10年後のあたしも、きっとそうなるはずだ。

あたしは手紙を、キャピタル・テクニカルサービス社の受付さんに託す。

きっと10年後のあたしも、この手紙を読んで、こんな風を感じるの
だろう。

あたしはいつまでたってもあたしだ、と。

『手紙を受け取れ！この野郎！』

（宇瑠璃春花著）

1・鬼ごっこのはじまり

キャピタル・テクニカルサービス情報管理部機動課特務係係長の鐵くろがねは迷彩柄の装束を纏まとい、自らハンドルを握り、初冬の深夜の街を駆け抜けていた。

本社でもエース級の彼が追う目標……それは「10年後のあなたに」という企画に当選し、手紙を渡すべき相手だ。

普通ならば、営業か広報が手紙を渡すべき簡単な業務なのだが……鐵が担当するのは世界的冒険野郎・岩田圭祐！

彼は手紙を受け取る権利を得た10年前に「俺はあなた方に挑戦します！俺の全力をもって居場所を隠し！逃げます！それを阻止したいならば、あなた方も全力で追って来てください！」と、宣言した。30代の若さと経験を兼ね備えた自信を試す意味もあったのだろう。

互いに互いの分野の一流を名乗る以上、受けて立つことになった。
ある意味、互いの宣伝にもなった。

おかしな事にその後、岩田氏に協力するスポンサーも幾つか名乗り
をあげ、世界を舞台にした壮大な鬼ごっこへと発展した。

それから岩田氏は忽然と姿を消し、現れたかと思うと……エベレス
トやK2、北極犬ぞり横断、と普通ならば追う事が難しい場所にて
健在けんざいをアピールした。

まあキャピタル・テクニカルサービス社としては冷や汗ものだが、
それはそれ。

本社も特務隊を育てつつ、地道に、通信会社の意地にもかけて全力で
追い上げて行った。

そして、10年後。刻は来た。

私はふところ懐に岩田氏に渡す手紙を忍ばせ、小型無線で部下に指示を出しつつ目標を追う。

岩田氏は地方都市のスポンサーにかくま匿われているようだが、車で他の場所に移動する事がわかった。

目標の車は福岡都市高速道路を駆け抜けている、と部下からの報告。その方向は海岸線……港……？

鐵は支部に無線でへりを依頼。目標の車を追寄せた。目標の軽ワゴンは高速道路を降りて、深夜の空いた道路をすり抜けると軽やかに港へ駆け込み、ある一隻の中型船にドリフトで乗り込んだ。
だ。

鐵の四駆も港へ着いたが、寸手すんでの所で逃した。

「くそ！船は行ったぞ！へりはまだか？」

鐵は無線に怒鳴った。

『係長、へりは3機出動。船を追っています。内1機は3分で迎えに

あがります』と、支部から返事。

鐵は追いついた部下と共に車載モニターマップにて予測進路を超高速度シミュレーションする。

このシステムも岩田氏を追うために社をあげて開発し、防衛省からも注目されるまでに精度をあげてきた。

鐵もシミュレーション結果に表情が曇る。巡視船並に移動する船。このままでは目標は国外、領海を出る事になる……。ヘリでは追いきれぬか……。

鐵に、係長補佐の白金が駆け寄ってきた

「係長、岩田氏の次の行き先がわかりました！仁川空港からエアーズロックスに向かう、と知人同士のメールから判明です」

鐵はそれを聞き「支部から本部へ。出張先変更手続き頼む。後は福岡空港からチャーター機頼む。処理はいつものように」と無線にて伝達しつつ、ノートパソコンで報告書をまとめる。

白金がため息をつく。

「前はチベットでしたが……今度は砂漠ですか……いつになったら帰れるやら……」

鐵は荷物をまとめるながら白金の肩を軽く叩き「なあに、クリスマスまでには帰れるさ」と苦笑いで励ました。

遠くの空が明けてきた。

吐く息も白く、冷たい空気が頬に気合いを入れる。

ここから先、伝説の『エアーズロックの決戦』が起こるのは3日後の事である。

2・届いた招待状

キャピタル・テクニカルサービス情報管理部機動課特務係係長のくろがね鐵はチャーター機内でつかの間の休息をとっていた。

胸ポケットからこっそり妻と娘の写真を眺め、久しぶりにまなじりを10度下げた。

妻と娘にはばれない程度に居場所を報告している。以前、5歳の娘には『パパは忍者だから誰にもパパのことを話さないように』とお願いしたら、驚いて真剣に頷いていた。妻は隣で笑っていたなあ……。『忍者みたいなものだから、あながち間違っていない』と笑っていた。今回、娘からは暗号メールで『コアラのぬいぐるみ！』のリクエストがきているが……。今から向かう場所にいるのはラクダと虫なんだよ……。

帰りの空港でぬいぐるみは買おう、と鐵は考えた。

そこへ係長補佐の白金がやってきて「係長、岩田氏がSNSに画像

付きで現れ『世界の中心へ愛を叫びに』と書き込みしています」と報告してきた。鐵もそれを聞いて、白金と苦笑いした。

ネットにアップされているのは岩田の日焼けした笑顔がいったいの画像で、その隙間から赤茶けた大地と青空が垣間見える。サイトのグッドマークやコメントもうなぎ登りに上昇している。

「画像のGPSデータは？」

「はい、暗号化されていましたが……見事に割り出せました」と、白金も困ったように答える。

鐵はため息交じりに言う。

「やれやれ、やっとご招待くださったか……今から他通信社のオーストラリア支部連中がくるし、その場にいる記者気取りの観光客にも宣伝ばっちりだ。すごい時代になったよ。手紙どころではない」

「そうですね、この作戦の為に、我が社が総力をあげてネットフリー通信網を広げた成果でもあります。それに、私はこういうおもしろい仕事ができる最高に楽しんでおります」

白金も意気揚々と答える。

「よし、とにかくこのまま岩田氏に一番乗りで接触する外部企業は我々で行くぞ！メンバー招集だ！作戦会議練り直し！本部にも同時通信の準備を！」

指示を出しつつ、鐵は画像のデータ解析内容を眺め、ふと考え、他データを含め詳細解析を試みることにした。

鐵ら特務隊は一直線に目標へ向かう。

赤い砂漠は熱をもってすべてを迎え入れる。

3・エアーズロックの決戦！

福岡で知り合った由比子に『満点の星空を見に行かないか？』と誘ったら、満面の笑顔で額うなずいてくれた。

そして、出発日。関西の修学旅行しか経験のない由比子は高速ドリフトで移動する軽ワゴンや、船や、初めての飛行機に「わあくくっ！ ジェットコースターみたいっ！」と圭祐の隣で大興奮だった。

由比子は機内にて、興奮しすぎて疲れて眠り……、起きて窓からの眺めに釘付け、空港でガイジンさんにビックリ、果てしなく飛ばす車にビックリ。圭祐が隣で見ている飽きないくらい、クリクリの目が大きくなりっぱなしだった。

「圭祐！ 30年生きてきて、こんなに冒険を満喫まんきつしたのは初めてです。圭祐はこれよりすごいことをしているんだからすごいよね！ 本当にすごい！」と由比子は圭祐に小学男子のような笑顔と賞賛しょうさんを述べた。

普段の由比子はすっかりものなのだが、仕事以外ではおっちょこちよ

いが垣間見える。数年前に海岸清掃ボランティアでたまたま知り合い。「なんだかおもしろい奴」と思って話してみたら、共通の趣味がいくつか合って、なんかいいな、と思った。

まさか『剣玉』と『どんぐりコーヒー作り』と『探検』と『スケッチ』と『月の観測』と『猫の肉球を嗅ぐ』趣味の奴が俺の他にいるとは……。

世界最高峰の秘境は意外な場所に存在した。

意外に世間の俺の評判を知らなかったのもよかったのかもしれない。それから由比子に自分の事情を話し、地球レベルでの遠距離交際を始めて……今に至る。

「そうか、『エアーズロック』は『ウルル』というのね？」

ユラーラのキャンプ場に着いた由比子は、ガイドブックと実物を交互に見つつ、圭祐の説明も聞きつつ、真夏の日差しに目を細めた。気温40度越えの大地は果てしなく広がる。

「そう、アボリジニに敬意をはらい『ウルル』と呼んでいる。あそこ

は聖域だ」

それを聞いた由比子は遠くに見える岩山に手を合わせて拝みだした。

「由比子。神社とは……まあ、同じか」

圭祐も手を合わせて拝んだ。

登頂の前の祈りと同じく、体が空のように澄み渡った。

「何もないのに、意外に観光客が多いよね。世界に人はあふれている……。そして、虫も……映画を観ただけではこんな暑いところだなんてわからなかった……トイレの虫も……なんでも話で聞くのよりすごいよね……」

由比子は日焼けよりも虫にダメージを受けたようだが、やがて迎えた夜空の星を観たらそれが吹っ飛んだようだ。

隣にたたずむ姿が、息をのんで、本当に静かに天を仰いでいるので

「これを君に見てほしかった。なんでも話で聞くよりもすごいだろう？」

そういう俺のことばに、彼女は静かにうなずいて、南半球の星々を目に焼き付けていた。

翌日、多くの観光客と共に、ウルルの夜明けを眺めることにした。まだ暗い中、大勢の人と共に同じ方向を見つめる。肌寒い空気。由比子が手を握ってくるので、かるく握り返す。

「おはようございます、岩田圭祐さん」

後ろから男性の声があるので、振り向くと長身で厳いかつい日本人男性が立っていた。隣に数人の日本人男性もいて全員、作業着にネクタイをしている。姿勢の良さに圭祐も察した。

「おはようございます。朝早くに遠方よりお疲れ様です。」
と丁寧に礼を返した。

相手の男性は名刺を差し出し「初めまして、私、キャピタル・テクニカルサービス情報管理部機動課特務係係長のくろがね鐵てつと申します。今回、岩田様にお手紙を届ける担当でございます。お約束の10年前のお手紙、お受け取りくださいませ」と鞆からあの時の手紙も差し出した。

圭祐が手紙を一礼して受け取る。

由比子が圭祐と手紙を見つめる中、圭祐が由比子に話した

「由比子、これはね、俺の決意の塊だったんだ……。俺が由比子の歳の時に『冒険家として一流になる』という決意……。そして『最高の俺が、最高に最愛の人を見つけろ』という決意……。」

圭祐は手で厚手の封筒を破りつつ、中身を自分の手のひらに落としました。

手のひらには、白銀の指輪がひとつ。

手のひらにのせた指輪を見ながら

「若い熱血バカがやったことを、四十の俺が貫くのもバカなんだが……」

言っていて、圭祐も自身の耳が赤くなるのを感じる。

近くの観光客も、言葉がわからないなりに雰囲気きまつを察しだし、圭祐と由比子に注目し出す。由比子も真っ赤な顔で瞳から涙があふれそうだ。

「こういう……。バカな奴ですが……。勢いでこれはやっているようで

やっていますせん……。プロポーズしてもいいですか。お願いします」
なんだかバカ丁寧ていねい語になってしまったが、圭祐は由比子に頭を下げた。

由比子も圭祐に頭を下げ「はい！」と答えた。

周りから、拍手が起こり、他の日本人観光客からは「おめでとう！」と声もかかった。

圭祐は由比子の左手の薬指に、指輪をはめてみたが……。指輪はぶかぶかで、一同から笑いが起こった。

由比子は圭祐に「私、この指輪でいいよ」と涙と鼻水でぐちゃぐちゃの笑顔で言って、皆が幸せな空気の中で夜明けを迎えた。

朝焼けは力強く、金色の熱を放出し、世界を紫から赤に染め上げた。封筒の中身を把握していた特務隊はこの一連の様子をきっちり撮影し、それでも係長補佐の白金は素直に感動して泣いていた。

特務隊全員が『早く帰国して家族や恋人に会いたい』としみじみした。

鐵がコアラのぬいぐるみをおみやげにウキウキで帰国したことは言うまでもないか。

この『エアーズロックの決戦…実はプロポーズ』の様子はあらゆる方面でネット配信され、あらゆる賞賛しょうさんと『末永くもげろ・はぜろ』的罵詈雑言ばりぞうげんを浴び、ふたりは祝福された。

岩田氏はその後も冒険家として世界を飛び回り、愛妻家としても名を残すことになる。

くおしまいく (2013.10.18 ururi*haruka)

『その手紙は読まないで！』

く魔皇帝十年前からの刺客く』

（海見みみみ著）

自慢じゃないが、俺はイケメンである。イケてるメンズ、略りやくしてイケメン。その言葉はまさに俺に相応ふさわしいものだ。

顔の良さはもちろん、ファッションにだって抜かりはない。髪は毎月渋谷の美容室で切っているし、服も原宿の古着屋で買った物を見事に着こなしている。首筋からはカルバンクラインのck1を微かすかに漂わせるのが俺のスタイルだ。

しかしいくら着飾ってもイケメンは性格が良くなければ意味がない。だから俺はいつも誰にだって優しくしてきた。それと同時に少し間抜けな自分をも演じてみせる。

例えばわざとチャージしてないスイカで改札口を通ろうとしてピンポイントと警告音を鳴らす。それから少し恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべると周りの友人から「お前はイケメンなのにどこか抜けてるよなあ」と小突こづかれる。

これぐらいの演出がちょうどいいのだ。整えられた顔とファッション、それに優しさとちよつとばかりの親しみ安さ。これさえあれば俺

のような大学生の男子はモテる。断言してもいい。

そんな訳で俺はイケメンらしくモテモテな日々を過ごしていた。あっちに行けばあはーん、こっちに行けばうふーんである。

だがそんな日々を呆気なく崩壊させる刺客が密かに俺を狙っていた。そう、そいつは十年前から俺の薔薇色イケメン人生を破壊しにやってきたのだ。

その日の飲み会は多いに盛り上がった。安さとボリユームで定評のあるマイノーズという居酒屋が今夜の戦場だ。

大抵の男子はその酒の飲みっぷりと自身の面白さをアピールしながら隣席の女子を口説いている。そんなもって大抵の女子は「私、酔っちゃいました」といった感じで、口説いてくる男に隙すきを見せつけている。

今、まさにこの居酒屋では男女の愛の戦争が繰り広げられているのだ。

もちろん俺もその中の一人に加わっている。俺の隣に座る女子の名前は坂井柚子ちゃん。大学の後輩だ。俺は既に彼女のことを「柚子ちゃん」と名前で呼んでいる。それに対して彼女も満更ではない様子だった。

「先輩って本当に面白い人ですよねえ」

そう言って柚子ちゃんは俺の肩に頭を乗せてくる。それに対して俺は「ごらごら」と言いつつ、内心ではガッツポーズだ。

「先輩って」

「なんだい？」

「なんとなくがんもどきに似てます」

いや、それ嬉しくないから。

柚子ちゃんは一ホの子だった。でもこういうところも魅力なんだよなあ。語彙ごいのセレクトは難だが、それでもなんと良い雰囲気だ。これなら今夜は彼女とそのままベッドの中で魚にでもなれそうだ。

俺はとてもしい塩梅あんばいな気分で焼酎の烏龍茶割りを飲んでいた。

「ほらほら、もっと飲みなさいよー」

すると俺のグラスに更に焼酎が注がれた。それも尋常じんじょうな量ではない。半分ほど空いていたグラスに焼酎が溢あふれるほど、いや正確には溢れても注がれ続けていた。

どうやら俺の隣にたちの悪い酔っ払いがやってきたらしい。横目でその酔っ払いの顔を確認する。眼鏡をかけた垢あかぬ抜けない感じの女性だった。

はて、ふと疑問に思う。こんな女性飲み会に居たっけ？ 今この場にいる人数を一人ずつ数えてみる。その数は十一。ちなみに今日召集されたメンバーは十人。十一人いるとはまさにこのことか。

「あなた、誰ですか」

女性に向かって冷静に尋ねる。すると女性は一度ハツとした顔をした後、ようやく焼酎を注ぐのを止め、こちらに向き直った。

「どうも、私はキャピタル・テクニカルサービスの田中と申します」
そう言って田中さんは深々と頭を下げた。キャピタル・テクニカルサービスと言えば俺でも知ってるような有名企業だ。だが何故その会社の社員である田中さんがこの飲み会に混じっているのかがよくわからない。

「あの、実は探している人がいましたー。それでここまで来て、気づいたらお酒飲んでました！」

そう言って田中さんは舌を出し、てへっといったポーズをする。つまり他人の飲み会に混ざって飲んでいたというわけだ。なんと適応力

の高い人なんだろう。

「で、その探している人と言うのは？」

「柳瀬隆司さんという方なんですけどー」

その一言に俺は思わず驚いてしまった。何故なら柳瀬隆司とは俺自身のことだったからだ。

その反応を見逃さないように田中さんが猫のような目をする。

「もしかして、あなたが柳瀬隆司さん？」

「ですけど」

「ひゃっほー！ー！ー！ー！」

突如田中さんが奇声をあげる。当然、飲み会のメンバーは全員田中さんの方に視線を送った。

「ここまで辿り着くまでの道程みちのりは長かった。でも、今それが報むくわれた！」

田中さんが感極かんきわまったように泣きはじめた。俺が咄嗟とっさにハンカチを

渡すと、田中さんがそれで勢い良く鼻をかむ。この人にデリカシーとかそういうものを期待するのは駄目だめらしい。

「まったく、あなた引越しし過ぎなんですよ！　中学卒業後に五回も引越しをするなんて、あまり普通じゃないですよ？　おかげで探すのに苦労しちゃいました」

田中さんの一言に思わず息を詰まらせてしまう。そこは俺にとって触れて欲しくないところだった。それに何故五回引越しをしたことを知っているのか。この田中さんという人物が俺にはまったく読めなかった。

「で、田中さんは俺にどのような用が？」

話題を逸らすようにそう尋ねる。すると田中さんは眼鏡のズレを直しながら高らかにこう告げた。

「あなたに、『十年前の自分からの手紙』を届けに来たんですよ！」

その一言に俺の脳内で様々なキーワードがパズルのように組み合わさっていった。

キャピタル・テクニカルサービス、五回の引越、十年前の自分からの手紙。

「今から十年前、我が社では会社の創立記念にあるイベントが行われてきました。それは日本人二十人を対象に、十年後の自分に手紙を配達するというものです！」

そう、確かにそういった企画が今から十年前に行われた。それに俺は応募し、見事その中の二十人に選ばれ、こうやって十年後の今に手紙が届けられたのだ。いや、届けられてしまったのだ。

「これがその手紙です！」

田中さんが鞆からこんぼう梱包された手紙を取り出すと、飲み会のメンバーが歓声をあげた。そりゃ十年前の手紙が届くなんてイベントが目前で発生したら、皆さん興味津々になりますよね。

「さあ柳瀬隆司さん、手紙を受け取ってください！」

田中さんが手紙を俺に向かって差し出す。それを俺は、

「お断りします！」

全力で拒否した。

もちろん周りには一気にポカーンとした空気が流れる。田中さんは驚きのあまり、拳骨げんこつが入りそうなくらい口を開けていた。

「あの、今なんと？」

「だから、受け取りを拒否します」

できる限り冷静な口調で述べる。すると突然田中さんの両目から涙が溢れ出し、文字通り号泣し始めた。

「困ります！ これをあなたに渡すまで私は会社に帰れないんです！」
わんわん泣きながら田中さんが詰め寄ってくる。それはもう大迫力だ。

そういえば十年前、イベントでは「十年後のあなたに必ず手紙を届けます」と言っていた。つまり俺に手紙を届けないかぎり、田中さんの仕事は終わらないのだ。

「そう言われても」

俺は困ってしまう。十年前の自分からの手紙、それだけは受け取るわけにはいかない。絶対にだ。

「ねえ、受け取ってあげなよー。可哀想かわいそうじゃない」

今まで話を聞いていた柚子ちゃんが俺の肩に頭を乗せてそう呟く。

今はその肩に乗った頭が非常に重く感じる。

「いや、これには深いわけがあつて」

冷や汗をかきながら必死になって言い訳をする。だが、

「手紙くらい受け取ってやれー！」

「そうだそうだ！」

やばい、飲み会のメンバーが調子に乗り始めた。しかも今の彼らは酔っている。何をするかわかったものじゃない。

頭の中でどの選択肢を選ぶべきか考える。

このまま受け取りを拒否するか、いやそれは難しい。下手したらこの飲み会のメンバー全員から空気が読めない奴というレッテルを貼ら

れかねない。

だがこの手紙を受け取るわけにもいかない。もし誤ってこの手紙を誰かに読まれたりしたら、その時待っているのは破滅だ。はめつ

いや、待てよ。いつそ手紙を受け取ってそのまま処分してしまえばいいんじゃないか。そうすればこの手紙は始めからなかったことになる。うん、それがいい。そうしよう。

「わかりました、受け取りましょう」

そう俺が口にするのと田中さんの顔はパァっと明るくなり、周りの奴らも再び歓声をあげた。

田中さんがまっすぐ手紙を手渡してくる。それを俺は確かに受け取った。

「手紙を受け取ってもらえたということでもよろしいでしょうか？」

「はい」

「それじゃあ記念にお酒を飲んでいってもいいですか？」

「はい、ってあなたまだ飲むんですか？」

こちらの驚きに対し、田中さんがにへらと笑みを浮かべる。あかん、この人完全に駄目な大人の典型だ。

「ねえねえ」

俺が鞆に手紙をしまおうとすると、柚子ちゃんが頬を突ついてきた。

「その手紙、読まないの？」

「読まないよ」

「読みたいな」

「駄目だよ」

一瞬、場の空気に嫌なものが流れる。

なんだろう、この嫌な雰囲気は。

「渡すだけ渡して」

「中身読まないとか」

「ありえないだろマジで！」

そう言うなり周りの男どもが俺に掴みかかってきた。皆酔っているせいで加減を知らず、かなり強引に拘束こうそくされてしまう。

やばい、これはかなりやばい。もしこのまま手紙を読まれたりしたら。

「何をする、やめてくれ！」

慌てて男どもの魔の手から抜け出そうとする。しかし彼らの力はあまりに強力過ぎた。

「えいっ！」

隙すきを見て柚子ちゃんが鞆から手紙を取り出す。

「えへっ、取っちやった」

そう言って悪戯いたづらに笑う柚子ちゃんの笑顔が今は悪魔あくまのように見えた。そのまま柚子ちゃんの手紙を開封し、その中身を読もうとする。

「それでは読みます」

「やめてくれえー！」

俺の悲痛な叫びが木霊こだまする。しかしそれも酔っ払って野獣と化した

面々の前では虚むなしいだけの響きだった。

「えーっと、『拝啓、我輩へ』……我輩へ？」

我輩、その言葉に場の空気が凍りつく。

「あの、我輩？」

柚子ちゃんが不思議そうに繰り返す。俺は顔を真っ赤にしながらの羞恥しゆうちに耐えるしかなかった。

それから先、手紙はこう続く。

『拝啓、我輩へ。十年後ともなれば、魔皇帝たる我輩も今やこの世界においても王となっていることだろう。我が魔眼「クリムゾンアイ」もそう予言している。十年前の我輩から、そなたへ忠告を送ろう。【組織】は確実に動き出そうとしている。まるで我が魔皇帝軍の動きを邪魔するように。奴らはとても危険な存在だ。

【組織】を潰すためには我が千五百ある魔封印を限定解除する必要があるかもしれない。闘いの時は必ずやってくる。魔剣「カオ

スセイヴァー」の鍛錬を怠らぬように。それでは我らが再び出会う場所「アカシックワールド」でまた会おう。シャル・グリロワ・エル。魔皇帝キールロワイヤルより』

そう、この手紙は十年前に俺が抱えていた負の遺産であり、俺を密かに狙う刺客でもあった。

中二病、いわゆるその中でも邪気眼系の妄想に当時の俺は取り憑かれていた。

中二病とは簡単に言えば幼い頃に「自分は凄い人物なのではないか」と錯覚してしまふ現象のことである。

俺もその中二病を患い、自らを「魔皇帝キールロワイヤル」などとも乗っていた。もちろん名前の由来は当時偶然手に取ったカクテル辞典からである。

普通中二病は中学を卒業するころには完治し、それからは過去の行いを恥じるようになる。

だが俺の完治は人よりかなり遅かった。俺は高校生になっても「魔皇帝キールロワイヤル」を名乗り続けたのだ。その結果見事イジメの標的となり、五回も学校を転校するハメになった。

だが五回も痛い目を見たからこそ学習もした。「魔皇帝キールロワイヤル」なんて名乗る痛い人間のままじゃいけないと。

それから俺は見事に大学デビューを果たした。現在のイケメンな俺の誕生である。

見事イケメンになり、真っ当な人間として生き始めた頃から、俺は密かに恐れていた。「魔皇帝キールロワイヤル」だった頃の自分がいつか露呈するのではないかと。

だからこの手紙の存在が告げられた時、俺は恐怖したのだ。十年前の自分「魔皇帝キールロワイヤル」という名の刺客と再会してしまうことを。

見事に飲み会の空気は凍りついていった。皆が皆俺から視線を逸らし、

全てを無かったことにしようとしている。柚子ちゃんに至っては俺から距離を取り、まるで可哀想なものを見るような目でこっちを見ている。

終わった、そう俺は確信し項垂れる。

ふと隣を見ると、田中さんは相変わらず一人で陽気に酒を飲んでいった。

「次はカクテルでも飲もうかなー。すいません、キールロワイヤルーっ」

「嫌がらせか！」

田中さんの注文に対して、俺は思わず叫び声をあげていた。

それから微妙びみょうな空気のまま飲み会は終了し、皆散り散りになっていった。最後まで皆、俺のことを憐あわれみながら。

明日からの大学生活をどうしよう。そんなことを考えると憂鬱ゆううつな気持ちになってしょうがない。俺はこれからきつとあだ名が魔皇帝君になり、周りから後ろ指さされるのだ。

ああ、俺の人生終わった。

そんな感じに呆然としていると、隣に人がまだいたことに気づいた。田中さんだ。

「いやあ、良い飲み会だったねえ」

「最悪の飲み会だよ！」

再び田中さんの言葉にツツコミを入れる。だが田中さんは全然気にしていない様子だった。

「もしかして気にしてるんですか？ 手紙の内容」

「気にしてるよ、十割り増しで気にしまくってるよ！」

「あはは、そんなことをですか」

「そんなことって、あんたな」

俺は思わず喧嘩腰けんかごしになりそうになる。すると田中さんはとても不思議そうな表情を浮かべていた。

「お友達のこと、信用してないんですか？」

その問いに胸が痛くなる。確かに簡単に人を信用できたらそれほど楽なことはない。でも俺は「魔皇帝キールロワイヤル」のせいで過去五回も引越しをしてきたような男なのだ。その五回の間、にどれだけの裏切りや絶望があったかは、もう思い出したくもない。人を信用することは俺にとってもっとも難しいことだった。

翌日、俺は憂鬱ゆううつな気持ちで大学に向かった。髪はいつも通りオシヤレにスタイリングされ、服も決まっているはずだ。でも目だけは死んでいることだろう。

「おーっす」

すると後ろから声をかけられた。振り向けとそこには昨日の飲み会で一緒だった男達の姿があった。いきなり鉢はち合わせとは最悪だ。

「お、おはよう」

ぎこちなく挨拶する。だが次の返事は決まっている。俺を馬鹿にして遊ぶつもりなのだ。

だから俺は彼らから発せられるであろう最悪の言葉を覚悟していた。「いやー昨日の飲み会は凄かったな」

「凄かった凄かった。皆飲みすぎちゃってな」

「おかげで全員昨日の記憶がないってのも凄いやな」

そうそう、飲みすぎたせいで記憶がって、え。

今なんて言った？ 全員飲みすぎて、記憶がない？ そんな馬鹿な。

昨日は全員そこまで飲み過ぎず、手紙のことでもあって冷静に帰っていったはずだ。記憶がなくなるわけない。

「というわけでまた飲み会セッティング頼むよ」

「よろしく頼むぜ」

男達が俺の肩を叩く。

その時ようやく気づいた。彼らは昨日のことをなかつたことにしようとしてくれていているのだと。彼らはあの手紙が俺の心に深い傷を与えたことを察してくれたのだ。

「みんな……」

その優しさに思わず涙ぐむ。すると男達が俺の背中をバシバシと叩いた。

「まあ気にするなー」

「それでも気にするなら、キールロワイヤルの一杯でも奢ってくれ」
「って結局ネタにするんかい！」

俺がツツコミを入れると皆が笑った。素晴らしきかな男の友情。俺

は彼らを信じて良かったんだ。

「あの」

すると今度は別の方向から声をかけられた。そちらに振り向くと、そこには一人の女の子が立っていた。

「先輩、今からちよつといいですか？」

女の子、柚子ちゃんはとても真剣な表情を浮かべていた。

俺は柚子ちゃんに呼び出され、大学でも人の少ない穴場の休憩スペースに連れて行かれた。どうやら柚子ちゃんには何か重要な話があるらしい。それはきつと昨日のことだろう。

男達は皆笑って流してくれた。でもそれは彼らが俺と同性だからだ。柚子ちゃんとは俺とは違う、女の子だ。それも恋仲になりそうな、微妙な関係の。

そんな関係の男が過去に「魔皇帝キールロワイヤル」なんて名乗ってたと知ったらさすがの柚子ちゃんもドン引きだろう。この恋も終わ

りか。俺は密かにそう覚悟かくごしていた。

「先輩に尋ねたいことがあるんです」

「なんだい？」

まるで死刑台にでも立ったような気分で問いかける。ああ、柚子ちゃんのことかなり好きだったんだけどなあ。それだけに嫌われるのが凄すごく辛い。

そして柚子ちゃんはその問いを口にした。

「魔皇帝の彼女になつたら、やっぱり人類と敵対しないといけないんですか？」

一瞬、俺は啞然あぜんとし、それから爆笑した。

そうだ、そうだった。柚子ちゃんはアホの子なのだ。俺とつきあったら魔皇帝の彼女として人類と敵対しなくてはいけないのか、そう彼女は本気で悩んでいるのだ。それにこのどこまでもアホの子な告白の

仕方。俺は柚子ちゃんのことを愛しくて堪^{たま}らなくなった。

「大丈夫！ この世界は魔皇帝キールロワイヤルが既に支配済みである！」

敢えて芝居がかった口調でそう告げる。すると柚子ちゃんは「良かったーお母さん達とケンカしなくて済む」と実にアホの子な事を口にし、笑っていた。

「だが俺達の鬪いはまだまだこれからだ。さあ行くぞ！」

そう言って手を差し出すと、柚子ちゃんは嬉^{うれ}しそうにその手を握^{にぎ}り返してくれた。

『お友達のこと、信用してないんですか？』

田中さんの口にした言葉を思いだす。

今なら言える「皆の事を心から信用できますよ」と。

『そして10年が過ぎた』

(へくとばすかる著)

「10年後の私に手紙を、という企画なんですか？」

「そうです。覚えていらっしやらない？」

「申し訳ないが……まったく記憶になくてねえ」

「そうおっしやらずに、取りあえず受け取っていただけだと思いますが」

「ふむ。おもしろい話です。しかし……何分にも記憶が。キャタピラ社？」

「キャピタルです！」

受取人を前にして、通信サービスで有名なキャピタル社の配達人は困惑していた。

ここからが勝負なのである。

もちろん手紙を受け取ってもらえれば、ひとまずは成功と言える。

『10年後のあなたへ、手紙を送ってみませんか？』という企画が発案されたのは、まだキャピタル社が創業間もない頃であった。

10万人の応募者のうち、わずか20人という幸運を手にしたはずの当選者。

たとえ当選したことを忘れていても、本人にはまちがいないのである。

「わかりました。私が忘れているほどの10年前。いったい過去の私がどんなことを書いたのか、興味津々ですね。ぜひとも中身を見たいものです」

「そうでしょう、そうでしょう。では、確かにあなたへの手紙をお届けします！」

配達人は「では、お約束を果たしたので、私はこれで」と言って、ドアを閉めた。

細くなるドアの隙間すきまから、受取人が手紙を読み、顔にわずかな微笑が現れたのが、チラッと見えた。

「で、どうだったのでしょうか？」

「感觸としては、ほぼ今まで通りですね。しかし、何となくですが、もう一息のような気がします」

「そうですか。あと一息。……そうですか」

「私もそのように信じたい。いや、きっと近いうちにそうなりますよ……」

配達人は受取人の家を後にした。

初めて受取人の家を尋ねたのは、もう何年も前のことだ。

「おめでとうございます！」

という言葉で、10年前の手紙を渡そうとした日を、ありありと覚えている。

そのときの受取人のキョトンとした表情も、決して忘れはしない。

そして手紙を受け取ってはもらえなかったことも。

受取人の妻から、この10年の間に本人が記憶障害になり、記憶がわずか1日しか続かなくなってしまった、ということを知ったときは、全身に驚きのショックを感じるほどだった。

受け取らなかったのは手紙を出した記憶が、本人から消えてしまっていたからだだった。

キャピタル社としては、手紙を渡してしまえば、それで会社としての責任は果たしたことになる。

しかし配達に立ち会った者として、彼は「それだけでいいのか？」という疑問に悩むことになった。

彼は決意した。

記憶を失った受取人との出会いが、そろそろ潮時かな、と考えていたことを実行に移すきっかけになった。

退職。そして、受取人の記憶を取り戻すことに、退職後の情熱を振り向けたのである。

ひまさえあれば、彼は受取人の家を訪問した。

そしてそのたびに、キャピタル社の名刺を取りだしては自己紹介し、受取人自身の書いた10年前の手紙を渡すのである。

ルーティンワークのように、それは繰り返された。

歳月が過ぎ、次第に受取人に微妙な変化が見られるようになった。手紙を受け取るようになった。

そして手紙を開くようになった。

開いた手紙を読む表情が、少しだけ明るくなっていった。

だが。

記憶は戻らなかった。

わずか1日で元の黙阿弥もくあみだった。

しかし。彼は努力を続けることにした。それが……それが俺の責任なんだ、と。

なぜなら創業当時、10年後への手紙を企画したのは、他ならぬ彼だったからである。

そしてある日。

受取人の妻が、ぽつりと言った。

「ありがとう。でも、もういいんです」

「何ですって？」

「うちの人が、うちの人が……昨日、宣告を受けたんです。お医者様の話では、末期だって」

妻の声は、細く、今にも消えそうな声をふりしぼって、それだけをつぶやいた。

彼は顔を覆おおった。目の前が急に霞かすむような気がした。

「なんて残酷な医者なんだ。急にそんなことを言ったんですか？」

「ええ。それが……なにしろ本人は1日だけしか覚えていませんから」
何てことだ。

「奥さん。あと1ヶ月だけ。1ヶ月だけ続けさせてもらえますか？」

「は？」

「私もここまでがんばらせてもらったんです。諦めたくはないんです」

「よ

「ええ、でも……」

「お願いします！」

この数年で、元の手紙は摩耗まもうして、ぼろぼろになっていた。
コピーを取り、コピーの方を読んでもらい、原本はいつか記憶がも
どった日のために保存していた。

キャピタル社には特別に無理を言っ、制服を借用し、退職後も本
来は着れないはずの制服を着て、この家に通った。

そして、毎日が初対面でしかない受取人と、「本当に」十年一日の
ように、同じ配達を繰り返す日々。

記憶を取り戻す。

受取人が生きているうちに、そんな奇跡はやってくるのだろうか。

そして今日。

配達を始めて10年目。受取人が手紙を出してからだと、20年の日々が過ぎていた。

今日はちょっと体調がすぐれない。明日に行こうか。

そう考えていた矢先。

電話が鳴った！

まさか。

「もしもし、もしもし」

「あ、今すぐ来てください。うちの人……大変なんです！」
奥さんからの急を告げる電話だった。

電話を置いた。

急がねば。何としても急がねば！

あとを息子に任せて、家を飛び出した。

「タクシー！」

必死で手を上げる。

流しのクルマをつかまえると、大慌てで言った。

「医大病院へ。急いでください！」

手紙を待っていたあの男が生きているうちに。意識が薄れてしまう前に行かなければ。

祈る手には、本物の手紙が握られていた。

泣きたいような気持ちと、笑いたいような気持ちが最大の振幅で揺れ動いている。

（落ち着け！）

制限速度いっぱいになる座席で、今は消えてしまったキャピタル社の帽子をかぶりなおした。

そして、もう何百回も、何千回も言ったひとことを繰り返した。

「おめでとうございます。10年前のあなたからの手紙ですよ！」
手紙にひとつぶの涙が落ちた。

『コイ×ソラ』

(檜崎六呂著)

この作品は、いちおうミステリーとなっていていますが、ミステリーとしての難易度は低く設定しておりますので、あまり難しく考えずに読んでいただけたら幸いです。

その手紙が届いたのは、父の七回忌ななかいきを終えた翌日のことだった。

妹夫婦は昨夜のうちに帰宅し、数日ぶりに独りとなった我が家の、水の音ひとつしもない静寂せいじやくを破った、コトリ、という何かが落ちる音。

普段であれば気にすることのないくらいにささやかなその音が気になったのは、きつと昨夜までの喧騒けんそうのせい。

居るときは煩わづらわしかつたのに、居なくなると寂さびしいなんて――。

「――典型的な独り者のおばさんじゃないの、それじゃ」

まだ30前だ、ってのに、と私は皮肉まじりにつぶやくと、よいしょ、と声を出しながら立ち上がり、玄関へと向かった。

この家は、私の亡くなった父から受け継いだ。

父が脳溢血のういっけつで倒れもう後もわずかというころになって、生前分与せいぜんぶんよという形で私のものとなったのだ。

とは言え当時の私は大学生で、どう考えても独りで住むにはや広すぎた。

だから処分してしまおうか、とも思ったのだけど、父が最期さいごまでどうしても処分を許さなくて。

結局どうしようかと迷っているうちにタイミングを逃してしまって、あつという間に父が亡くなり、さらに私も就職することになってバタバタと時間が過ぎて、気付けばもう7年も経ってしまったのだ。

廊下に出て玄関へ目をむけると、玄関ドアの右手側にある郵便受けのところ、一通の封筒らしきものが見えて、先程の音はあれか、と足を前に出そうとした私は、そこでふと、その封筒のことが気になった。

嵌め殺しの磨りガラスから差し込む日の光のせいかやたらと黒く見える封筒に、首筋にちり、と電気が走ったのだ。

なぜだろう。

なぜか私は、怖い、と感じたのだ。

その、一通の封筒に。

「——なによ、ただの封筒じゃない」

私はそう自分に言い聞かせつつ、郵便受けに近づく。

『オバサン』になると急に臆病になる、と父方の従姉妹が言って

いたことを不意に思い出すが、まさか私が、役所で腐るほど封筒を見ている私が、たかが封筒ひとつに怯えるわけがないと思ひ直して、しかしすぐには手に取らずに、封筒を覗き込む。

黒い、封筒だった。

角2と呼ばれるA4の紙がすっぽりに入るくらいの大サイズの封筒には、光沢のある表面に厚みのある金のインクで宛名がセンスよく書かれている。

封筒を手にとってみると、指先から高級な漆器しっきに触れたときのようなしっとりとした肌触りを感じて、それ自身がただのダイレクトメールではないことを高らかに主張しているように思えた。

それに、この宛名――。

私は宛名に書かれていた、この10年口にしたことのなかったその名を、口にする。

「如月――菖蒲、さま」

その名を口にした途端、10年前のあの日の情景が脳裏いっぱいに拡がった。

妹が部活の合宿で居なかった、あの日の朝。

リビングで言い争う両親。

リビングで半狂乱になって暴れている父と、それを必死になつて止めている母。

外に出ていなさい、と叫ぶ母の声。

そして、家を飛び出した私が見た、夢とも現実ともつかない街の風景。

「——お母さん」

私は不意に口から漏れたその4文字の言葉に驚く。

10年前に家を出て行って、手紙ひとつよこさないよいいな人を、私はまだそのように呼べるのか、と。

「——バカバカしい」

私はそう吐き捨てる、封筒をひっくり返す。

裏面の左隅。

そこには、宛名と同じ金文字でこう書かれていた。

「株式会社キャピタルテクニカルサービス、……『10 Years Letter』
運営委員会？」

私は何の事だかさっぱり解らずもう一度封筒を表に返すが、そこにはやはりここの住所と母の名前しか書かれていなかった。

「なによこれ。やっぱりダイレクトメール——」

なんじゃないの、と続けようとして、私は気付く。

キャピタルテクニカルサービスは、大手調査会社だ。

その調査会社が、なぜとつくに籍も外れている母の名で、わざわざ今頃ダイレクトメールを送ってくるのか、と。

私は改めて裏面を見る。

やはりそこには間違いなく、『10 Years Letter』運営委員会』と書かれていた。

「10年……手紙？　なんだろ、これ」

私は首を傾げながら、とにかく中を見てみよう、封筒とともにリ
ビングへと戻ることにした。

父は、まさしく典型的なあの世代——いわゆる『新人類世代』の男性だった。

お金も時間もレアなレコードや趣味で育てていた錦鯉にばかり注ぎ込み、私や母が何をしていようと——どれだけ悩んだり苦勞していても無関心。

私たちに怒鳴り散らすこともなく、かといって話し掛けてくるどころか笑顔を向けることもない、そんな人だった。

その父が、唯一怒鳴り散らしたことがある。

それがあの日私が見た、最初で最後の激昂げきこうした父だった。

父を激昂させたのは、母だった。

リビングのテーブルに封筒を置き、キッチンに入ってコーヒーマーカ―のスイッチを入れる。

コポ、コポとカップに珈琲が注がれていくのを横目に、アイランドカウンターの引き出しからハサミを取り出すと、そのままテーブルに戻って封を切り、またキッチンに。

ハサミを引き出しに戻したのと同時に、コーヒーマーカ―が静かになる。

私は珈琲の入ったカップを片手にリビングに戻ると、ソファ―に座ってまず一口だけ飲んでから、改めて口の開いた封筒を取り上げ、中身を指で抜き取った。

もともと母は社交的な性格で、私が小さい頃は私を連れて、私が小学生になると私をおいて、暇ひまさえあれば友達とよく遊びに行っていた。もちろんそれだけなら、ほんの少しだけ寂しかったけど、父にないがしろにされていた母の気持ちを考えたら、仕方のないことだろうと思っていた。

——もし。

もしあのととき、母に駄だ々だをこねていたら。

もしあのととき、父に訴えていたら、10年前のあの父の姿を見ることは無かったかも知れない。

母も、まだこの家に居たかもしれない。

あの日。

母に外に出てるように言われ、ふらふらと街をさまよったあげくにたどり着いた近所の公園で、私はあの夕陽を見た。

黄色でも赤色でもない、鮮血のような朱色。

いつもとは違って、どこか不吉な感じがするその夕陽を一人で見ていることに、私は嫌な予感を覚えていた。

『ここに居たのか』

ベンチに座っていた私に、声をかけてきた父。

夕陽に照らされているはずの父の表情が、まるで日影に佇んでいるかのように昏くくら悲しげに見えたのは、私の気のせいだったのだろうか。

『……お母さん、は？』

尋ねた私の声が恐る恐るだったのは、どうしてだったのだろうか。

『お母さんはな、居なくなっただけ』

『居なくなっただけ？出てっちゃったの？』

思わず問い返した私に無言でうなずいた父を見て、私はそれほどシヨ

ツクを受けなかった。

香水のことや鼻歌のことで、こうなるかもしれない、とは覚悟していたからだろう。

『しばらく苦勞をかけるな』

そう言つて私の頭を軽く撫なでる父にそんなことないよ、と返して、私はもう一度夕日を見る。

夕日は、私を慰なぐさめるわけでも責めるわけでもなく、ただゆっくりと山の稜りょうせん線せんに身を沈めていた。

封筒の中には、より小さな一通の封筒と厚みのある一枚の紙が入っていた。

私は封筒をテーブルに置くと、まずその紙を拵げると、コーヒーをもう一口飲んでから内容を確認する。

企画に関するいきさつや参加への感謝の意、当選者を10年間追跡してきたことへの謝罪の言葉などが書かれたその紙を斜め読みしてからテーブルに戻し、その手でもうひとつの封筒を取り上げて――

そして、思い出したのだ。

白地に水玉模様のようにうっすらと描かれた可愛らしい猫の絵に、ペンで流れるように書かれた文字。

それが、母の字だった、ということ。

最初に気づいたのは、残り香だった。部活が予想以上に早く終わった高校一年の夏の日、帰宅した私の鼻に微かに感じた、香水の残り香。これまで嗅いだことのないローズ系のその香りに、私は強烈な違和感を覚えたのだ。

なぜ香水を嫌っていた母が、なぜ、と。

次に気づいたのは、鼻歌だった。昔から料理をつくるとき、母は鼻歌を歌っていたのだが、夕食どきにリビングでテレビを観ていると聴こえてくるそのメロディが、気づけば変わっていたのだ。

それまでの母ならとても聴きそうにないような当時の流行歌に、私は香水のこともあって、嫌な予感しか覚えなかった。

しかし、それでも私は、母を信じていた。たとえ父を裏切ったとしても、少なくとも私を裏切ることはない、と。

まさか母が、年下の男性と浮気なんてしてるはずがない、と。

「……忘れてると思つてたのにな」

妙にファンシーな封筒の、そこに書かれた母の字を見つめながら、私はぽつり、とつぶやく。

「あの時の鼻歌、『さくら』だったっけ」

森山直太郎の『さくら』。今でもあの曲を聴くたびに、台所に立つ母親の背中をぼんやりと思ひ出す。もちろんその母親の顔や声は思い出せなかったのだけど。

その母親の書いた手紙が、今日の前にある。

あの背中が何を考えていたのか、もしかしたらこれで解るかも知れない。

私は手紙の端をつまむと、指で封筒の縁を切り裂こう……として、やめた。

なんとなくだが、乱暴に扱っちゃいけない気がしたのだ。

「んもう、片付けなきや良かった」

私はブツブツと愚痴ぐちを吐きながら、手紙を手 kitschin に戻り、またはさみを取り出してそつと封を切り、リビンリビングに戻る。勢せいいが削そがれたせいせいか漏れた溜息ためいきがやたら大きく聴こえ、思わずふつ、と笑ってしまった。

「さて、と。ごめんね、読ませてもらおうから」

私は母に……というよりは、その封筒に向けて詫わびると、中から封筒と同じ柄の便箋びんせんを取り出した。

あの日、公園に迎えにきた父と帰宅した私は、玄関の前でふと立ち止まり、視界に入った庭の池を見た。

父が錦鯉を飼いたいと、家を建てた時に奮発して作らせたその池が、何故かコンクリートで埋められていたからだ。

まだその表面がゼリーののようにプルプルと震えているコンクリートを見て驚いている私に、父はぽつり、とつぶやいたのだ。

『母さんがいなくなったら、日中に世話を手伝ってくれる人もいなくなるからな。思い切って処分したんだ』

『え？だって、錦鯉ってお父さんの大切な——』

思わず振り向いた私の目に、父の悲しげな笑みが映る。

『母さんのために、錦鯉を処分したんだ』

そう言って声を詰まらせた父の目に涙が滲むのを見て、私はようやくこれが現実なんだ、と実感したのを、今でもよく覚えている。

そうだ。母はもう、ここにはいないんだ、と。

10年後の私へ

こんにちは……かな？

それとも、お久しぶり、かしら。

何だか変な感じよね、10年後の自分に手紙を送るのって。

私には今、目の前に2つの道が見えています。

一つは、これまでと同じ道。もう一つは、違う誰かと歩く道。

私はその分岐点に立って、どっちに行こうか迷っています。

多分、10年後のあなたからすれば、懐かしいとか言って笑っちゃ
うような迷いでしょうけど、今の私にとっては重大事です。

どっちの道も、数メートル向こうが見えなくて、そこに崖が在っ
ても今の私には見えなくて。

これまでと同じ道には、あの人と大事な娘たちが立ってるけども、その先には地獄のように退屈な日々が待ってるはずですよ、それを私の本能が嫌がってるから、簡単にはそちらには進めない。

これまでと違う道には私に微笑みかけてくれる彼が立っているけども、ほら、30年も生きてるんですもの、甘い誘いには罠があることくらい解ってるから、何も考えずに彼に飛び込んでいくだけの勇氣も出ない。

だから、私は迷ってる。

彼かあの人のどちらかが私の手を引っ張ってくれれば、私は諦めてそちらに行くのに。

彼もあの人も、私の手を引っ張ってはくれない。

ねえ。あなたはどちらを選んだの？

彼？それとも家族？

ねえ、どっち？

「……何よ、これ」

手紙の一枚目を読み終えた私が発した感想が、これだった。

私のことを『大事な娘』ですって？

普通はここは名前を書くところでしょうに。

それを、まるで、名前が思い出せなかったことを誤魔化すように、『大事な娘』ですって？

「そんなにその不倫相手が良かったのかしら？ 家族の名前すら書けないくらいに」

私の口から堰せきを切ったように毒が吐き出される。

「私たちと過ごす生活が、地獄ですって？」

毒が私の周囲を漂ただよい、私の皮膚ひふから体内に染みこんでいく。

「これじゃ——これじゃ、まるで、」

これ以上は吐き出したくない、という気持ちと、このまま吐き出し

てしまいたい、という気持ちが入り混じる。

台所で背中を向けて鼻歌をうたう母の姿。

あの時の母は、私たちを見てすらいなかったのか。

「私たちやお父さんは、あなたの人生の『付属物』みたいじゃない！」

部屋に置かれた装飾品や、カバンに付けたアクセサリのように。

私たちは母にとって、人生をいろどるための家具の一つでしか無かつ

たのだ。

「……そっか。だからさよならも言わずに出ていったんだ」

父の、『大事な娘たち』の居る世界を、仕方ないからとあっさり割り切っていないなくなった母。

そんな母の血を受け継いだ私もまた、だからこそ未だに独りなのかも知れない。

「ま、かえって良かったのかな？結婚してたら母と同じことをしてたかも知れないし」

私は自嘲気味につぶやき、二枚目の便箋びんせんを読み始め――

――そして、頭が真っ白になった。

『……え？なんで？』

あの日の夜。部活の合宿から帰宅した妹が、すっかり何も無くなったりリビングに入って発した第一声が、これだった。

『なんでリビングもキッチンも空っぽになってんの？ってかお母さんは？』

リビングとキッチンは、私が帰ってきた時にはもう何もかも無くなっていた。父は半狂乱になって暴れまわったあと、母が居なくなっただけに冷静になったらしく、壊してしまった何もかもを全て処分したのだ、と私は聞いていた。

その、ガラんとしたリビングで母が居なくなっただけを父から伝えられた清美の、あり得ないとばかりに目を見開いたあの表情を、私は今でも鮮明せんめいに覚えている。

清美はその後、母の話をしなくなった。

私もその後、母の話はしていない。

10年後の私へ

もう一枚、書くことにしました。

一枚目を捨ててしまっても良かったんだけど、あの人に見つかったら大変だし、10年経ってから読み返して昔を懐かしむのも悪くないかな、って思ったので、あのまま一緒に送っちゃうね。

読んだらさっさと処分してね、10年後の私。

さっき、彼と別れてきました。

一枚目を書き終えたあと、ふと庭に居たあの人が目に入ってね。池の錦鯉を見つめるあの人の目を見て、ふと思い出したのよ。

そういえばあの人が、私を見るとときもあんな風に優しく目をしてるな、って。

笑っちゃうでしょ？私は錦鯉と同格なのよ？

あれだけ丹精たんせいこめて世話しているあの錦鯉と同じくらい、あの人は私を大切に思ってくれてるのに、私はまったく気づかなくて。

あの人は私を見てすらいないんだから、なんて勘違いかんちがして、外に男まで作って。

情けないくらい最低な話だと思わない？

彼は最初は反対したけど、やっぱりどこかで潮時しおどきだと思ってたみたいで、最後には納得してくれた。

あの人に告げ口されるのを覚悟してたけど、彼も自分の家庭が大切だったから、それはしない、と約束よそわしてくれて。

だから私たちは、互いにすべての痕跡こんせきを消して、綺麗きれいに別れることができたの。

——まあ、あなたなら覚えてるとは思うけどね。

これで良かったんだ。

私にはあの人と、晶子と清美が居る。

彼との思い出は心のアルバムにだけ遺^{のこ}して、私は家族と生きていくんだ。

ねえ、10年後の私。

晶子や清美、そしてあの方は元気？

晶子は頑固^{がんこ}者だから、まだ結婚してなさそうね。

清美はきつと、あつたかい家庭を築いてそう。

あの方は——うん、あの方はきつと、あの方のままかな。

あの優しい目のままの、あの方でいてほしいな。

ねえ。

あなたは今、幸せ？

「……うそ」

思わず声に出していた。

ありえない。

だって、母は出ていったのだから。

私や妹を置いて、最低限の荷物だけ持って。

そんな母と、この手紙の母は、まったく違う。この手紙が真実なら、母は出ていく気持ちなど、微塵みじんも持ち合わせではないなかつた——ということになる。

「……待って。ちよつと待ってよ」

私は自分に言い聞かせるようにつぶやくと、手紙をもう一度読み返し、そしてもう一度、添付てんぷされていた案内文を読み返す。

なにかがおかしい。

どこかに違和感がある。

——でも、なに？

「……そうか」

ふと。

私は思いついて勢いよく立ち上がり、そのまま隣の床の間を抜けて縁側えんがわに向かう。

そもそも、父はどうして家を手放させようとしなかったのか。

独り者の私にはとても不自由な大きさと解っていたはずなのに。

縁側にやってきた私は、息を整えながら真っ直ぐ庭を見つめる。

その、雑草が蔓延はびこる庭の中心には、草一本生えていない、直径二mくらいの楕円の形をした余白がある。

それが、コンクリートで埋められた、元の池だった。

そもそも、どうして父は、あの日突然池をコンクリートで埋めたのか。

錦鯉を処分するだけなら、コンクリートでわざわざ埋める必要はない。

もちろん、錦鯉への未練みれんを断ち切るためかも知れないが、それにしてもらった数時間で、しかもリビングやキッチンで自分が破壊した家財道具を片付けながら作業するほど、急がなくちゃいけない理由にはならない。

私はその、元は池だったコンクリートの地面をしばらく見つめた後、もう一度リビングに戻る。

テーブルの上に置いたままにしていた黒い封筒と案内文を手に取り、もう一度読み返してみる。

そして、もっとも重要なこと。

それはそもそも、あの手紙はなぜ我が家に届いたのかだ。

世界屈指の調査会社であるキャピタルテクニカルサービス社の案内文には、確かに『当選者を10年間追跡してきた』と書いてあった。

つまり、あの会社は、母がこの家に居ると判断したのだ。

もう10年以上居ないはずの、この家に。

「——そう、しかないわよね」

私は改めてすべてを振り返り、ある結論に至って。

そして、電話をしたのだ。

——警察へと。

※ 作者より

この『問題編』には、『解答編』に繋がる全ての材料が揃っています。

ミステリーが苦手な人のために、かなり分かりやすい伏線を大量に投入していますので、おおその方はこの時点で『謎』について『解答』が予想出来ていることと思いますが、そもそも何が『謎』なのか解ってらっしゃらない方のために、『謎』を改めて提示しておきます。

彼女が語っていた『あの日』。

10年前のその日に、彼女の家で何が起こったのか。

そして、その出来事の結果、母親はどこに行ったのか。

さあ、解りましたでしょうか。

ここからがいよいよ『解答編』となります。

皆さんの予想が合っているかいないか。
お楽しみいただければ幸いです。

二週間後の、昼下がり。

私は、同じように喪服を着たままの清美と、縁側に腰掛けて庭を見
ていた。

「……信じられないよ」

放心したようにつぶやく清美に、私も無言で頷く。

「お姉ちゃんも大変だったね、取り調べとか、葬式の段取りとか」

「ううん、それは別に」

そう返した私の声に、自嘲じちようめいたものが混じっていて、思わず苦い

笑みがもれる。

「……気づいちゃったのは、私だから」

そう答えた私に、清美がはあ、とため息を返してくる。

「まったく、お父さんがこんな人だったなんて、思いもしなかった」

「清美……」

清美の憤慨ふんがいするような、でもどこか悲しげでさみしげな声に、私は

そっと頭を撫なでるしかなかった。

池を埋め尽くしていたコンクリートから、魚の骨とともに母の骨が見つかった。

通報者として立ち会っていた私は、骨を見ても驚かなかったことから、そのまま警察に連れて行かれて取り調べを受けることになった。

最初は私を容疑者として考えていた刑事さんたちも、コンクリートの成分調査や母や錦鯉の骨の状態、母の友人だった由美子さんの証言、父が最期まで家売ることを拒んでいたことを当時の看護師さんが覚えていたなどの状況証拠から、父が10年前に母を殺した、もしくは不慮の事故で母が亡くなり、父が死体を遺棄したという結論に達したらしく、取り調べを開始したその3日後には私も解放され、そしてつい3日ほど前には、『被疑者死亡』として事件も最終することになったのだ。

「……でも、どうしてかな」

私に頭を撫なでられながら、清美がぽつりとつぶやく。

「ん？なにが？」

「お母さん、肺にコンクリートが入ってたのに、暴れた様子が無かった……って言ってたからさ、なんで抵抗しなかったのかな、って」

そう。

警察の説明によると、母の直接の死因は後頭部に受けた打撃による脳挫傷のうざししょうだったが、即死には到らず、どうやらコンクリート詰めにしてるときもまだ生きていたらしい。

速乾性ではない普通の生コンが固まるまでには、通常ならば一昼夜は必要で、少なくとも母が生きている間は、はい上がることはできなくとも、足搔あくことはできたはずだ。

しかし、母は動かなかった。

胸のところで組まれた両手に力を入れていた形跡があったことから、むしろ母は意図的に動かないようにしていけたらしい。まるで、全てを受け入れるかのように。

「……きつとね、」

私はそして、庭にぽっかりと開いた穴を見つめる。

もうこれで、この家は売りたいくても買い手が付くことはないだろうな——と思いつながら。

「きつと、受け入れたんだよ。お母さんは」

「受け入れた、って？何を？」

重ねて尋ねてくる清美の頭をポンポン、と軽く叩く。

「自分の運命を。自分の罪を。そして——」

あの日、部活の合宿で居なかった清美。

居なくて正解だったと、今でも本気でそう思う。

清美の思い出の中くらいは、父と母が昔の父と母のまままでいて欲しいから。

「——父の思い全てを、かな」

私はそう答えると、良く晴れた空を見上げる。

空にはいくつかの雲が、風に流されてふわり、ふわりと浮かんでいった。

まるで、池を泳ぐ鯉のように。

『過去からの告発』 (流民 著)

あれから九年の時間が経った、もう誰も俺の事を覚えていない人間な
んていないだろう。

ようやくこんな生活からもおさらば出来るだろうか。俺はそう思うと
酒でも飲んでしまいたい気持ちになつてしまふ。しかし、今ここで酒
でも飲んでうっかり過去の事を口を滑らせてしまつては元も子もない。
「後もう少しだ。そうすればもっとましな生活をする事もできるだろ
う……」

とにかく、今はもっとも慎重に行かなくてはいけない、あと半年浮
足立つ事も無く、今まで通り堅実に生きていこう、それに半年後には
美代と結婚し、俺は美代の姓である『田辺』になる。そうすればもう
こんな生活からは……

美代はこんな俺に寄り添つて、支えてくれた、その美代に報^{むく}いる為
にも、俺はとにかく後少しの間大人しく過ごそう。俺は隣で眠る美代
の顔を見ながらそう心に誓つた。

俺の今の仕事は下らない仕事だ、もうすぐ四〇歳を迎えようとしているが、居酒屋のアルバイトで、年下の店長にはいつも説教をされながら仕事をしている。

しかし、こんなバイトも後少しでやめて、もっと違う仕事をするつもりだ。

あの事件以降こんな仕事しか俺は出来なかったが、後少しすれば前に行っていた仕事に戻ろう。そうすればもっと金にもなって美代に楽をさせてやることもできるだろう、そうすれば美代との結婚もスムーズに進むはずだ。

四〇前でこんな居酒屋のバイトをやっているような奴に娘を取られるのはそりゃ、どんな親だって心配だし反対もするだろう。俺が同じ立場だったもちろん反対する。でも、俺はこんな仕事で人生を終わらせるような男じゃない、その事は俺自身が一番よく知っている。

おっと、今こんな生活を送っているのは、俺がそういう風に自信過

刺に生きていたからという事もあるんだろう。もっと堅実に生きてい
かなくては、もう九年前の失敗を繰り返さない為にも。

それにもうあの時みたいな幸運は無いだろうしな。いや、あの時の
事はもう忘れよう。もう俺はあの時の俺ではなく、あの時俺は死んだ、
そして今は生まれ変わった人生なのだから。

いつもの通り夜中に居酒屋の仕事が終わり、家に帰る。

家では遅い時間にも関わらず美代は必ず起きて待っていてくれる。

「お帰りなさい。お疲れ様」

「ああ、ただいま」

「ご飯食べた？ お腹すいてない？」

「ああ、大丈夫まかない食べて来たから」

俺がそう言うのと美代は少し微笑む。俺はこの美代の笑顔にいつも癒
されている。しかし美代にも辛い過去があった。それがどんなものな
のか未だに俺には話してはくれないが、その美代の辛さを俺は少しで

も癒してやりたいと思う。おれがいつも美代の笑顔に癒されているように。

「美代、明日も仕事だろ？　いつも先に寝ててくれてもいいんだぞ」
少し首を振って美代は答える。

「どうしてもまだ一人じゃ寝れなくて……」

美代はまた昔にあった辛い事を思い出してしまふのだろう、そしてまだその事が過去の思い出にする事も出来ずに、未だに美代の心の中に鮮明に残っているのだろう。

「だから起きて待ってるって言う訳でもないんだけどね。だって、私が仕事から帰ってくる時にはもう幹雄さん、仕事に行つて会えないんだもの。一緒に住んでもそんなすれ違つてばかりの生活なんて嫌だしね」

美代の言葉に俺はどうしても美代を抱きしめたい衝動に駆られ、美代を強く抱きしめる。

「すまない。俺がこんな仕事しかできていなくて……」

「ううん、いいの。そんなこと気にしてないから」

「ありがとう……」

俺はただ一言、美代にそう返す事しかできなかつた。

「さあ、幹雄さん。もう寝よ」

俺はこくりと頷き、抱きしめた美代を離す。

時計を見るともう二時を廻っている。俺と美代はそのまま布団にもぐりこみ、お互いの体温を測るかのように体をくっ付けて眠りに落ちていく。

そんな毎日が俺と美代の間で随分と続いている。時には喧嘩をしたりすることも有ったりするが、俺は今までの人生の中でこれほど幸せだった時はなかった無いだろうか？ その幸せの時間を俺は手放す事は出来ない。いつしか俺はもう昔の俺とは違う俺になってしまっていたのだらう。

そう、あの九年前よりも以前の俺には……

美代も昔の事を俺には語ってくれない、もちろん俺もそれを聞く事

も無かったし、美代も俺の過去の事を聞くことは無かった。それで今までお互いうまくいっていたし、これからも恐らくそうだろうと俺は思っていた。あの手紙が届くまでは……

ある日俺が仕事から戻ってくると、美代はいつもの通りいつもの通り食卓の前に座り、俺の事を待っていてくれた。

「ただいま」

俺がそう声を掛けるが、美代はその声も聞こえていないかのようだった。

いつもと違う美代の様子に、俺は何か喧嘩の種になる様な事でもあったかと思いをめぐらせるが、何もそんな事は思い浮かばない。

「美代？　どうかしたか？」

俺は美代の向かい側に座る。

美代は俺の事をじっと見つめ、そっと手紙を食卓の上に滑らせるように差出す。

「なんだこの手紙？」

美代は黙ったままで手紙の方を見つめている。

俺は差し込まれた手紙を手に取りそこに書かれた宛名を見る。

そこには俺の名前が書かれている。そして裏側を見るとそこにも俺の名前……いったいなんだこの手紙は？俺の中でだんだんと嫌な気持ち膨らんでくる。

俺は引き攣った笑顔を美代に見せながら手紙の中を確認する。

「今日、私が仕事から帰ってきたら通信会社の人が出て、この手紙をあなたに渡してほしいと言って置いて行ったの。十年前にあなたが書いた手紙よ」

俺は手紙の中を見て今までの事総てを告発された気持ちになってしまった。いや、それ以上にこの手紙の中に書かれている人物の中に『美代』を想う気持ちがここまで書かれているなんてことを予想もしなかった。

「美代……これは……」

「あなたは誰なの？」

いつものあの俺を癒してくれる笑顔は、もはや美代の顔にはなかった。

「オレは……俺だよ」

俺は力なく何とかその言葉を口にする事しかできなかった。

「ねえ、この手紙の書いた人誰だか知ってる？」

力なく俺は頭を横に振る。

「私は知ってる。その人は橘幹雄。私の婚約者だった人。でもその人は九年前に私の下から姿を消した……私を置いてね」

美代は俺に初めて自分の過去を話している。俺は美代の過去を聞いて愕然とする。まさか、あの時入れ替わった男が美代の婚約者の橘幹雄だったなんて……

「はは、ははははは……まさかね。まさか十年前からこんな手紙が届くなんてね……」

美代の俺を追及するような眼は変わらず、俺の心の中を抉るようだ。「あなたが『幹雄』さんを殺したの？」

暫く俺は何も答える事が出来ず、部屋の中には重苦しい空気が漂う。
「ねえ、どうなの？　あなたが『幹雄』さんを殺して、成り代わっているの？」

美代の言葉に、俺はゆっくりと頭を振り、ようやく自分の過去を話す事を覚悟決めた。

「これだけは最初に言っておく。俺は『橋幹雄』を殺してはいない」「じゃあ、『幹雄』さんは何処にいるの？」

「今はもうどこにもいない。『橋幹雄』はもうこの世にはね……」「やっぱり……」

美代は声を押し殺し、嗚咽おえつを漏らし、涙を堪こらえ何とか声を振り絞る。

「『幹雄』さんは……あなたが、あなたが殺したんじゃない……どうして死んだの？」

「今からあの九年前の事をありのままに話す。聞いてくれるね？」
力なく美代は頷く。

「俺の本当の名前は『田戸泰治』。九年前まで俺はある会社の経営し

ていた。かなり儲^{もう}けていてね。それなりに金もあつたんだが、徐々に経営も苦しくなってきた。実際、社員に給料も払えなくなりそうになるくらいで、銀行からの融資はもちろん、いろんなところから金を借りまくっていてね。もう会社の経営は火の車だったよ」

美代は俯いたままだったが、黙って俺の話聞き続けているようだ。「そして、俺はあの九年前のあの日、もう死のうって決めただ。結婚もしていなかったし、親も早くに亡くした。だから、俺には何も守る物なんて一つもなかった」

俺は美代の方を少し見て、また話す。

「最後に酒でも飲もう、そして酔っぱらって気持ちよくなって、どこかのビルからでも飛び降りようって、そう考えてた。そしてたまたま入ったバーにいたんだ『橘幹雄』がね」

『橘幹雄』の名前に美代は少し反応した様に、少し体をびくりとさせる。

「奴は楽しそうに話していたよ、二か月後には結婚するんだってね。」

俺は羨ましかつたよ、俺の隣の男は幸せの絶頂を迎えつつあって、俺はその反対に寂しく人生の終焉を迎えようとしている。なんて不公平な人生なんだろうってね。実際思ったよ。この幸せそうな面をしている男を殺してやろうかってね」

美代は俺の方を向き、その両目に氷のような冷たい感情を乗せて俺の方を見ている。

「さっきも言っただろ？　俺は『橘幹雄』を殺してなんかいないってね」

美代はそれでも俺の事を冷たい目でにらみ続ける。

「話を続けよう。それから俺は『橘幹雄』の話を黙って聞き続けた。

そして、奴はもう終電だって言っただけで急いで帰って行ったんだ。よっぽど美代と結婚できるのが嬉しかったんだろね。かなり酔っぱらってたよ。足元もおぼつかない位ね。で、その時に奴は俺の鞆を間違えて持って行ったんだ。俺にしてみればもうどうでも良かった。もう俺は明日には生きていないんだからね。そして奴が出て行ったあとしばらく

く飲んで、俺もようやく死ぬためにそのバーを出た」

俺の話に黙って聞き続ける美代。相変わらず美代の眼は、冷たく俺の事をにらみ続けている。

「そしたら妙に駅の方が騒がしかった、もう俺にはどうでもいい事だったんだが、どうしても気になってしまったね。何が有ったのか見に行っただ。そしたら人身事故だって、若い男が回送電車にはねられて、身元も解らない位ぐちゃぐちゃな状態だって。でも俺には解ったんだ。そいつの来ていた服と、その鞆を見てね。俺は一瞬で酔いさが醒めた。そいつはさっきまでバーで幸せそうに語っていた『橘幹雄』だった。警察がきて手荷物を調べた時に中に入っている免許書がちよつとだけ見えたんだが、間違いなくそれは俺の免許書だった」

「なんで……なんでその時に名乗り出なかったの？そしたら私は……今までこんな気持ちを抱えて生きてこなくてもよかったかも知れないのに。ねえ、なんで？」

美代は俺の事を責めるが、言葉がこれ以上出てこないのか、また黙っ

てしまう。

「最初はそうも思った。でも、考えてみたらこれはチャンスだって思ったんだ。俺は死んだことになり、そして俺は『橘幹雄』としての人生を歩み始められる。幸せそうだった奴には申し訳ないけど、俺はまだ生きていける。そう思ったらもうその事しか考えられなくなった。これで俺の人生はやり直しができる！　また違う人生を生きていける！　そう思うとそんな事を言う事なんで出来やしなかった。思惑通り次に日のニュースでは『田戸泰治』が死んだことになってたよ」

俺がそこまで話すと美代は泣き崩れてしまう。俺はその姿を見ている事が出来ずにそっと立ち上がり、部屋を出る。

「美代、今までありがとう……」

俺は最後にそう言うのと部屋の扉を開け、外に出る。そして、あの九年前にできなかつた事を今実行する為にどこか手ごろなビルを探す。

「これで終わりか……やっぱ俺の人生大したことなかつたな……」
ビルの屋上に上り、そこから見える景色を見渡す。街の明かりに照

らされた街を見ると余計に寂しく感じた。

そして屋上の外周に掛けられたフェンスをよじ登ろうとした時に妙に下が騒がしい事に気が付いた。

赤く光る回転灯、それに野次馬。

「まさか……嘘だろ？　こんな事……」

※

『次のニュースです。昨夜午前四時頃、ビルの屋上から飛び降り自殺が有りました。かなり死体の損傷が激しく、身元は所持していた免許書から『橘幹雄』さんと判明しました……』

番外編 .. 『手紙よりも』 (宇瑠璃春花著)

平成十五年、師走も深まる午後五時過ぎ。

空から夕闇と冷気が降りてくる中、東京下町の工場『武嶋精密』の前に一台の白い軽バンが停まった。車体には『CTS』のロゴがある。その車から作業着を着たひとりの男性がいそいそと降り、工場の事務室へ向かった。

「こんばんは。遅くに失礼します。キャピタルテクニカルサービスの本間です」

と、本間と名乗る営業部の者が慣れた手つきで穏やかに事務室に入ってきた。

「まあ、本間さん。いつもお世話になります。おかげさまで製品は順調です。期日までには予定数は十分間に合う予定です」

と、汗の染みつく作業着を着た工場の社長が帽子をとって挨拶をする。

「いえ、社長の技術は弊社へいしやにはなくてはならない重要なものです。設

計図の通りに製品化できるかは機器の性能だけではありません。社長はじめ、こちらの皆様の熟練じゅくれんの技術があつてこそです」と、本間は熱く語る。

「本間さんは本当に職人気質ですなあ。私らを見込んで最新の精密鑄型機器設置してもらい本当に感謝です」

「仕事をお願いして二年になりますね、早いものです。実は、今日は仕事の話ではないのです。ああ、奥様、立ち話で十分な時間で済ませますのでお茶はお構いなく。奥様も一緒にお聞きしていただきたいお話なのです」

と、本間はお茶を淹いれてきた社長の妻にも声をかける。

きよとんとする社長夫婦に、本間は鞆から一通の開封済みの封筒を取り出して、社長に手渡した。

「これはうちの住所ですね。しかし、切手が貼っていない。これが何か？」と首をかしげる社長。

しかし、宛名の文字を見つめて息を飲む妻の顔を見て、本間は話を

続けた。

「はい。これは弊社の企画である『十年後の自分へ手紙を送る』という企画に応募くださったものです。この企画に当選した方は二十名で、他の方、このお手紙を出された社長の息子様も落選されてしまいました」

そこまで聞くと、社長は思わず中の便せんを取り出して広げた。

便せんにはこう書いてあった。

『武嶋 一雄様 節江様

家を飛び出して、三年。私は○○製鉄に勤めています。

よそで働いて初めて、親父の凄^{すご}さや優しさがわかりました。製鉄は住み込みなので大丈夫です。

仕事は厳しいですが、親父に負けないようにがんばります。

もし、この手紙が届いたら、連絡してもいいですか。

その時は親父に顔向けできるようになっていると幸いです。

それまではがんばって一人前になっておきます。

おふくろも元気でいてください。

読んだ社長と妻の顔がゆがむ。

本間は社長夫婦に直角の礼をしつつ、一枚の紙をふたりに差し出した。

「社長。手紙の中身を読んで申し訳ありませんでした。社長から息子様のお話をちらっと伺っていたので、手紙の中を確認しました。大変に失礼で、余計なことでしょうが、これが一番いいことだと思い、本日伺いました。〇〇製鉄社員寮の電話番号はこの紙に書いてあります。電話してあげてください。私は電話していいと思います」

本間からメモ紙を受け取ったのは妻だった。妻は、本間に一礼をして、夫である社長を見つめた。社長も頷いた。

「では、社長。今日はこれで失礼します。申し訳ありません。ご無礼をお許しください」

「本間さん。こちらこそ、申し訳ない。……感謝を述べるのはこちらの方がだ。ありがとうございます」

社長夫婦は本間に深々と頭を下げた。

本間が事務所を後にすると、社長はすぐさまメモを見ながら電話をかけた。

「もしもし、はい、私は武嶋と申します。すみませんが、武嶋修平が
おりましたら電話を変わっていただけないかと、はい………しゅ、
修平か……？俺だ、父ちゃんだ………うんうん、いや、父ちゃんも
どなり過ぎて悪かった………すまん。いいから、正月には帰ってこい。
いいな………母ちゃんも待ってるぞ、うん、いいんだ………まずは帰って
こい。話をしよう。正月には帰ってこいよ………待ってるぞ………」

事務所の灯りと電話の会話を感じつつ、本間は軽バンに戻った。

「どうだ？うまくいったか？」

助手席には同期の広報課所属の松山が待っていた。

「ああ、松山。多分、大丈夫さ。これで社長さんも元気になると思う」
「『我々はハードを扱っているようで、実はソフトを、ひとの技術と
こころをサポートしてこそなんぼ！』のお前らしい仕事だと思うよ」
と、松山は本間の口まねをしつつ返した。

「そうだよ。これからはもっと機器は小型化・精密化する。それを支
えるのは人の技術だ。武嶋精密の安泰あんたいが弊社の安泰なのだ！うまくいっ
たお礼にラーメンおごるよ！チャーハンと餃子もつけよう！」

作業着の男ふたりは談笑しつつ、軽バンで夜の下町を抜けていく。
星は見えないが、街の灯りが希望を示す。

『ノート』

(檜崎六呂著)

2014年、10月25日——11時15分。

そのとき、それはやって来た。

漆黒のスーツを着て、その瞳に穏おだやかな笑みをたたえて。

先日越してきたばかりの土地。

先日越してきたばかりのアパート。

そのドアの向こう側に、それは静かに立っていた。

「山根——孝一郎さん、ですね」

それは開口一番、僕の名を尋ねる。

そんなことはドアの外側に貼ってある表札を見ればすぐに分かるじゃないか、と思わないでもなかったが、まあここは流れに任せようと、僕ははい、と応える。

そのスーツの塊は僕の応えにニコリと笑いながら——
ああいや、既に微笑んでいたんだから『笑いながら口許を持ち上げた』が正解なんだろうか。

まったく、日本語という言語はややこしくていけない。もう30年近く使っているというのに。

「お待たせいたしました」

それは、確かにそう口にした。

しかし、僕には意味が理解できない。

僕は何を『お待たせ』させられていたのだろう。

僕は首を捻りながら、まず、引っ越してから今日までの2日間のことを振り返る。

引っ越しはすべて独りでやった——と言っても持ち込んだものは靴ひとつだけで、家財道具はすべて部屋に造り付けで用意されていたから、特に後から何かを送ってもらおうようなものはなかった。

つまり、引っ越してから今日までは少なくとも『お待たせ』されて

いたようなことはない、ということになる。

なら、引っ越してくる前の話だろうか。

僕は首を捻りながら、引っ越してくる前、3年過ごしたあの町でのことを振り返る。

——と言っても、振り返れるようなことは特になかった。

ただひたすらにいつ潰れても不思議じゃない仕事場（結局潰れたけど）と寝るためだけのアパートとの往復の日々。

小煩こうるきいだけの会社の上司と小狡こずるいだけの同僚と、改札の駅員とコンビニの店員と、あとは公園のベンチしか触れ合いのなかったそんな日々、それが言う『お待たせ』な出来事は存在すらしていなかった。

ならば、それより前か——

と僕はさらに過去へと戻ろうとしたが、そんなに昔の話なんて思い出せるわけがないし、思い出してもたいして代わり映えのしない繰り返しししかしてないのだから、思い出す必要もない。

だから僕は考えるのをやめることにして、それに尋ねたのだ。
首を捻りながら。

キョトンとした顔で。

「……あの、何か待たされてたんでしよるか」——と。

するとその漆黒のスーツの塊はさもありません、とばかりにほっほっと笑うと、右手に持っていた如何にも年代物っぽい革の鞆を開いて、中から真っ黒な紙切れのようなものを取り出した。

「こちらでございます」

そう言われて見たその紙切れは、しかし紙切れではなく真っ黒なノートサイズの封筒で、そこには達筆な金文字で僕の名前が書かれている。

「これは……？」

僕はその封筒に触れないようにしながら、しげしげと眺めてみる。

封筒には僕の名前以外の一切が書かれておらず、本来在るべき切手や消印すら捺おされていない。

つまり、このスーツの塊は、郵便配達に來た訳ではない、ということだ。

それは単に『とても胡散臭い奴』^{うさんくさ}と言ひ換えても良い。

その胡散臭い奴は僕に微笑んだまま、受け取れ、といわんばかりに封筒を差し出してきた。

「こちらは、貴方様宛ての『手紙』です」

そう、言われなくても分かることを馬鹿丁寧に告げられても、そう簡単にはいそうですか、と受け取れない。

僕が手の代わりにはあ、と間の抜けた声だけ出すと、男は分かっています、といわんばかりに頷き、スーツの内ポケットから一枚の名刺を取り出してきた。

「申し遅れました。私はキャピタル・テクニカルサービスの赤堀です」
そう言つて差し出された名刺を受け取り眺めると、なるほど確かに名刺には『営業企画課 企画課長 赤堀青児』と書かれている。

キャピタルテクニカルサービスといえ、10年前に設立された、今

では一部上場の大手通信会社だ。

その大手企業の営業のお偉いさんが、何社も零細企業をハシゴして
いるような僕に、一通の怪しげな封筒を届けにくる。

なんだろう。キャピタルテクニカルサービス、という名に、心の奥
がちくり、と痛む。

なんだろう。これは何か、虫のしらせ、ってやつか？

係長さんは僕に無人島で殺し合いでもさせるつもりなんだろうか。

「で、その赤堀さんが、どのような用件で？」

僕が内心の動揺をひた隠しにしながら尋ねると、係長さんは笑みを
浮かべたまま、右手で差し出したままの封筒をぐい、と僕に近付け
る。

「ですから、貴方様宛ての『手紙』をお届けに」

同じ答えを返してくる係長さんについてイラツときて、

「だからね？普通はね？消印も捺されてない、送り主も分からないものを、手紙とは言わない——んですよ」

弱い。なんで語尾が丁寧語になるんだ、僕は。

「何かの勧誘ですか？すみませんが、今の僕は金がないっす——」
「いやいや、私は本当にこのお手紙を届けに伺っただけですよ。お約束でしたので」

「お約束？」

僕は改めて封筒を見つめる。

さつきから胸の奥でチクチクと痛む何か、ムクムクと起き上がって来たように感じる。

なんだろう。

『キャピタルテクニカルサービス』と『手紙』。

——脳裏にふと、『仰げば尊し』が流れる。

卒業式だ。中学の。

クラスの皆が別れを惜しむ姿を独りで眺めていた、あの教室。そんな自分が嫌になって。

もしかしたらずっとこのまま独りなんじゃないか、って無性に怖くなって。

それで、送ったんだ。『10年後の自分へ送る手紙』を。

「思い出されましたか？」

係長さんの問い掛けが、僕をあの日から現実へと引き戻す。

「はあ、なんとか。まさか僕が選ばれてたとは思いませんでしたけど」
僕が素直に思ったままを言うのと、赤堀さんは微笑んだまま頷く。

「たしか当時はまだ未成年でしたね。ご両親にお伝えして了承を得て
ますから、おそらくご両親が貴方にお伝えしなかったのでしょうか」

赤堀さんの説明に、僕はなるほど、と頷き返す。
うちの親なら、面白がって僕に教えないだろうから。

『10年後の自分に送る手紙』という企画は、某国立電話会社から独立したばかりのキャピタルテクニカルサービスが創立記念に打ち上げたもので、会社が持つ追跡調査能力と、会社が確実に潰れない安全性を持っていることをアピールするために実施されたのだ、と、当時何処かのワイドショーで観た記憶がある。

実際こうやって10年経って、キャピタルテクニカルサービスは一部上場の大企業に出世するまで成長しているし、こんなに住所を転々としている僕の所にもあっさりやって来れたのだから、彼らのアピールもまんざらフカシではなかったのだと分かる。

「どうぞ、これを」

赤堀さんが改めて差し出してきたその封筒を、僕はまるであの卒業

式のときのように怖ず怖ずと受け取る。

「ありがとうございます。では——」

「あ、あのっ」

一礼して立ち去ろうとした赤堀さんは、僕の声にぴたり、と立ち止まる。

「はい、なんででしょうか」

背筋を伸ばし、まっすぐに見つめてくる赤堀さん。

「あ、いや、その、——これ、受け取らない人とかいないのかな、って」

しどろもどろになりながら尋ねると、赤堀さんはニコリと笑って、さあ、と応える。

「貴方様がお一人目ですから」

「あ、そうなんですか」

そう返しながら、僕はそりやそうか、と納得する。

僕が最初だから、わざわざお偉いさんがやってきたのか。

「もちろん、受け取りたくない方もいらっしゃるでしょうね。誰しも、未来の自分には何らかの希望を求めていますから」

赤堀さんはそう続けると、失礼します、と一礼して背を向ける。

僕は返す言葉も思いつかないまま、その漆黒の背中を見つめていた。

2004年3月——中学の卒業式の日。

僕は今、自分が一年間過ごしたごくありきたりな教室の、この一ヶ月ほどは座ったり座らなかったりした自分の席に座り、この3年間ろくに話もしなかった同級生たちが騒いでいるのをボンヤリと眺めていた。

卒業式が終わり、どこか中途半端な、ふわふわした気持ちになっているのだろう。教室のあちこちから聞こえてくるはしゃぐ声や泣き声や馬鹿笑いにすら、どこか空々しさというか開放感のようなものが含まれているように感じる。

この目の前で『何でもない自分』な気分を満喫しているおめでたい連中に僕は机を思い切り両手で叩いてにらみつけて「3月いっぱいまで中学生なんだぞ、分かってんの？」と怒鳴ったり

——なんてするわけがない。

だって、僕は空気だから。

いてもいなくてもどっちでもいい、空気だから。

過去の嫌な思い出ほど、思い出したくないものはない。
それが自分のせいならばなおさらだ。

僕はベッドに仰向けに横たわりながら、それでも脳裏に張り付いて離れようとしないう『思い出』という張り紙からなんとか目をそらそうと、頭だけ動かして部屋の中を見回す。

造り付けの家具。

真新しい調理器具。

買ったばかりの安いテレビ。

新しい会社の作業服。

ここには、何もない。過去から連れてきたものは、何も。

——その、テーブルの上にある黒い封筒以外は、何も。

中学の3年間、僕はただの『空気』として過ごした。

いや、最初は他の同級生と上手くやろうとしていたのだ。

でも、もともと容姿も性格もパツとせず存在感も薄かった僕が張り切ったところで、ただ『イタい』だけで。

やがて別のイタい奴がイジメのターゲットにされたのを見て、完全に心が折れたわけだ。

無駄な努力はしない。

別に3年間ずっと独りでおとなしくしていても、何も困らない。高校で上手くやれば良いんだ。そう思って、3年間を過ごしてきたんだ。

なのに、どうして――

どうして今、この教室の片隅にいる僕は、こんなに虚むなしいんだらう。

気づけば、部屋が真っ赤に染まっていた。

秋の日はつるべ落とし。目の前の手紙が届けられてから、もうすでに4時間は経ったわけだ。

「……なに、やってんだかな、僕は」

僕は吐き捨てるように言くと、苦笑いしながら起き上がり、テーブルの前にあぐらをかいて座る。

「たかが手紙じゃないか。封を切って、開いて、読む。それだけだろ？」
僕はそう自分に言い聞かせつつ、黒い封筒の端を左手でつまみ上げ、目の前で揺らしてみる。

「うん、ヤバいものはなさそうだな」

当たり前だ。ただの地味な中学生が卒業式のあとのちよっとした時間間に書いた手紙に、どんな細工が出来ると言うのだ。

「ただの手紙、だもんな」

僕はまた確かめるように手紙に向けてつぶやくが、手紙は言葉を返すことなく、ただ静かに揺れ動くだけだった。

『ええっ、10年間追いかけるんですかあっ?!』

——ふいに朝観たテレビのことを思い出した。

若い女子アナが大袈裟なりアクションを挟みつつしていたインタビューの場面だ。

『ええ。送って戴いた手紙の中から抽選で20通について、当社を持つ調査追跡能力をフルに使い、10年後、必ずお届けいたします』
インタビューを受けていた黒いスーツの男性の言葉があまりにもバカバカしくて、逆によく覚えていた。

要するに、その男性の会社に『10年後の自分に宛てた手紙』を送れば、10年後に必ず送り主に送ってくれる、という企画の話だった。10年も経てば、人はいろんなものが変化する。特に今の時代なら一カ所に留まっていることすら難しいはずだが、その男性はいとも簡単に言っただけなんだ。必ず送り届ける、と。

……何でこんなこと思い出したんだろう。

そうだった。まさしく『きっかけはフ○テレビ』だったわけだ。僕はあまりのくだらなさに、手紙をつまんだまま大笑いする。

チキンのくせに。

なんでも斜め後ろからしか見れなかったひねくれ者のくせに、毎日テレビだけは欠かさず観てたんだっけ。

クラスの奴と世間話をするかもしれないから、って、それこそ3年間、欠かさずに。

「……イタいなあ、ほんと」

僕は自嘲気味につぶやき、手紙をまたテーブルに放り投げる。

そんなイタい僕が書いた手紙だ、何を書いたかは覚えてなくても、イタいことを書いていることは間違いない。

「どうせ、いらん期待とかしてたんだろ」

僕はそう吐き捨て、——でも何故か目は手紙から離れようとしなかった。

「……10年後の自分、ねえ」

僕は自分の10年後を想像してみるけど、漠然ぼくぜんとしすぎてイマイチ実感がわかない。

でもまあ、それもそうだ。僕には——少なくとも今の僕には『将来なりたいもの』とか『将来やりたいこと』なんてないし、なにより僕自身が僕に何も期待してないのだから、将来の自分が何をしているかなんて考えようがない。

僕はバカバカしくなって、窓の外を眺める。この一年間気がつけば見上げていた空は、まるで祝福するような快晴で、小さな雲がぽつん、と浮かんでいただけで。

(……あの雲、僕みたいだな)

ふと。何気ないただの連想が、僕にある種を埋め込む。

もしかして、僕は一生このままなんじゃないか？——と。

——捨ててしまえばいい。

心の中で、誰かがそう囁いた。

このまま封を切らないでごみ箱にほうり込み、燃やせるゴミで出してしまえ。

——と、別の誰かがヤジを飛ばした。

過去なんて、その場で捨ててしまえばいい。

背中に余計なものを背負って歩ける余裕なんてないんだから。さあ。——と、また別の誰かが優しく囁く。

さあ、捨てるんだ、と。

捨ててしまえ。

今までと同じように——と。

もしかして、僕は一生このままなんじゃないか？
そんな思いに、僕の身体がぶるっ、と震える。

恐怖感ではない。嫌悪感だ。

そんなのは嫌だ、と、本能が叫んでいたんだ。

一生、このまま？そんな……冗談だろ？

僕は慌てて鞆かばんから一冊のノートを取り出すと、使い切れてない後ろのページを一枚破り取り、同じく鞆から取り出したシャーペンペンを握りしめ、小さく呼吸を整える。

一瞬、僕の奇行に誰かが気づいたかも、と周りを見回すが、クラスの連中は当たり前のように僕を見てはいなかった。

だって、僕は、『空気』だから。

いや、ダメだ、と僕は激しく首を横に振る。

捨てて良いのは、他人との過去だ。過去の自分の声まで捨ててしまつたなら、それは――

それはもう、『僕』じゃない。

そうだろうか？

「……よし」

僕は改めて背筋を伸ばすと、もう一度黒い封筒を取り上げ、気合いとともにも上端から少し下を指で一気にピリピリと破いて中身を引っ張り出し――

――そして、思わず嘔き出した。

中に入っていたのは、やたら金がかかってそうな案内文と、女子が喜んで使いそうなピンクのファンシーな封筒が一通。封筒にはそのファ

ンシーなイメージにそぐわない汚い字で大きく、『10年後の僕へ』と書いてあった。

「……そういや、あん時良くわからないからって、テキストに買ってポストの上でこれ、書いたんだっけか」

僕はくわあ、と意味不明な声を吐き出しながら案内文をテーブルに置くと、今度はそのファンシーな封筒に手をかける。

「……初めて開ける可愛い封筒の相手が、なんと昔の自分とはね」

苦笑いしながら開いたファンシーな封筒には、ファンシーな便箋が——ではなく、古びたノートの一ページを破いて四つ折にしたものが入っていた。

「いや、雑にしても程があるだろおい」

僕は思わずツツコミを入れつつ、その破いたノートの一ページを開き——

——そして、頭が真っ白になった。

——決めた。

書くんだ。

10年後の自分に、手紙を。

10年後の自分に、質問を。

今の僕が、10年後の自分に聞きたい、たった一つの質問を。

そう決めた僕はノートに覆いかぶさるようにして、ペン先を下の机に突き刺すくらいの勢いで、殴りつけるように文字を書きつけていく。

苛立ち。

怒り。

不安。

不満。

力を入れすぎてゐるせいだ、一文字書くたびにシャーペン芯がポキポキ折れ、そのたびにペンの頭を力いっぱい押し付けて芯を出して。

一文字一文字。

今の僕の全部を詰め込んで。

——そして、数分後。ドアを開けて先生が入ってくるのと同時に、僕のたった22文字の手紙が出来上がったんだ。
10年後の僕へ送る、手紙が。

たった一枚の、乱暴に破かれたノートの1ページに書かれていた、22文字の言葉の羅列。

それは僕の脳裏に張り付いていた想い出よりももっと深い、心の奥底に仕舞いこんでいたはずの記憶や想いまで引きずり出してきて僕の前に無遠慮にさらけ出していく。

たった、22文字の問いかけ。

その22文字が今の僕と10年前の僕を一気に引き寄せ、そして同一化していく。

その『手紙』には、こう書かれていた。

『自分のことを好き、と言えるようになりまいたか』と。

僕は、自分が嫌いだった。

人ときちんと話ができない自分が。

そんな自分にいろいろ理由をつけて正当化している自分が。

自分から望んで『空気』となった自分が。

そして、そんな自分を嫌いな自分が、僕はとても嫌いだった。

だから、聞いてみたかったんだ。

10年経っても、僕は自分が嫌いなのか、って。

「……まいったなあ」

僕はそう呟いて、天井を見上げる。

真っ赤に染まった天井が、溢あふれてきた涙で歪ゆがんでいく。

「10年。何やってたんだろ」

冗談っぽく呟いたつもりだったが、どうしても声の震えが止まらな
い。

「なんで、——なんで僕は忘れてたんだろう、この手紙のことを」

堪たまらなくなつて、僕は目を閉じる。

閉じた目の端から涙がつい、と流れ落ちる。

高校に入つても、高卒で就職をしてからも、僕はずっと人間関係が
上手くいかなかった。仕事はできるけど、他人と上手く関われなくて、
結局職を転々としてきた。

そして、そんな自分がずっと嫌いだった。自分を嫌いでいないと、

周りに認めてもらえない——そんな気がしていた。

そして、そんな気がしている自分が余計に嫌いで、だから『自分を嫌いだ』という想いを心の奥底に沈めて、そして忘れてしまっていたんだ。

「バカだなあ、僕って」

僕は目を閉じたまま、ぽつりとつぶやく。

そして。

僕は不意に、一つのこと気づいていた。

それはとても単純で、しかし単純だからこそ気づかなかったこと。

他人に認められたい、他人に好かれたいって言うなら、僕自身が僕を認めて好きにならないとダメじゃないか。

「……なんだよもう、そういうことか」

本当に僕はバカだ。

まずは、自分を許すこと。

まずは、自分を好きになること。

それが、前に進む最初の一步なんだ、ってことに、10年経ってようやく気づくなんて。

僕は左手で目元を拭うと、改めて右手に持った手紙に目を向ける。

15歳の僕が、初めて書いた手紙。その全ての想いを込めて書いた、22文字の手紙を、僕はそっとテーブルの上に置いた。

「——ありがとな、10年前の僕」

僕はそうつぶやくと、勢い良く立ち上がった。

『不誠実で素敵な恋』

（海見みみみ著）

今宵も春海は私の中で果て、ベッドの上で甘い吐息を漏らした。春海が全ての精を吐き出し、私の耳元で「愛してる」と囁く。その声
が私を更なる快樂へと導き、震えさせた。

行為を終えると春海はいつも私の髪を撫でる。それから私に思い切り抱きつき、その匂いを嗅いでくる。そんな春海が愛おしくて、私は彼のされるがままになっていた。

「愛してる」

再び春海が呟く。私はその言葉に答えるべく、春海の唇に接吻をした。

もうお互い四十にも近いというのに、性愛は尽きないどころか燃え上がる一方だ。春海と会うたびに私は体を重ね、女にしか味わえない幸せを堪能している。私と春海は身体の意味でも、心の意味でも、とても相性がよかった。

春海には婚姻関係を結んだ奥さんがいる。そして私にも結婚している夫が別にいた。つまり私達の関係は世間でいう所の不倫であり、浮気であった。

そもそも春海と出会ったのは会社近くのカフェでのごとだ。そこで偶然相席になり、軽く会話をして二十分もしないうちに「君のことをもっと深く知りたくなった」と言い出したのが、この春海と言う男なのだ。私は最初春海のあからさまな態度に飽きたが、同時に彼のまっすぐ過ぎる程の好意をとて興味深く感じた。もっと彼の事を知りたい。自然と私もそう思うようになり、それから二人の関係は急速に近づいていった。

私の家は共働きであり、子供もいない。夫は仕事ばかり優先し家に帰ってくることは少なかった。

そんな私にとって、仕事上がりは春海と会う時間だった。春海は個人で輸入品の貿易商をしており、比較的裕福だ。そして時間にも余裕を多く持ち、夜になると必ず私のために予定を空けてくれる。

最初、私は毎晩会ってくれる春海に不安を抱いていた。そんなことで彼の奥さんは何か言ってくれないのか心配だったのだ。

それを直接春海に聞いたと、彼は寂しそうな顔をしてこう呟いた。

「世の中には僕のお金にしか興味のない女性もいるんだよ」

その言葉を聞き私は気づかされた。

春海は孤独なのだ。結婚していながらも、奥さんに愛されていないことによって。

それは私も同じだった。私は結婚しているのに、夫とはもう五年もベッドを共にしていない。私と春海はお互い孤独な者同士だったのだ。だからこそ私達は惹かれあっていたのかもしれない。孤独というものはまるで磁石みたいだなと私は思った。

その日も私は仕事を終わると化粧をしっかりと直し、春海と待ち合
わせたレストランに早々に向かった。私は仕事帰りでスーツスタイル
のままだ。対して春海はいつも落ち着いた、けれどとても若々しい服
装をしてくる。この日の服装もシャツにテーラードジャケット、そし
てジーンズという実に春海らしいものだった。

テーブルにつき、まずはワインで乾杯する。春海は白ワインを好み、
私は赤ワインを好んだ。こういう対照的のところもまた春海の魅力だっ
た。

「僕達の関係ってさ」

スズキのカルパッチョに口をつけながら春海が話を始める。

「やっぱり間違ったものなのかな」

「あら、別れたいの？」

「まさか」

私の問いに春海が吹き出す。どうやら別れ話の意図はなく、ただ私

達の関係について語りたかったらしい。

「そりや間違ってるわよ。お互い他の人と結婚してるんだから」

「でもさ、僕達はこうして愛し合ってるじゃない。愛し合うことは罪なのかい？」

確かに、愛し合うこと自体は罪ではない。何せ「愛は地球を救う」なんて言われるぐらい、愛は尊とうとい存在なのだから。

「学校でもテレビでも宗教でも言うじゃない。皆で愛し合いましたって。それなのに結婚してるだけで他の異性を愛することを罪だと思ってるのは、僕はどうも納得いかないよ」

そこは倫理の問題なのだが、それを指摘したら春海はこう返すだろう。「そもそもその倫理って正しいのかい？」と。

春海の主張はとても理解できる。そして私もその主張に賛同したいと心から思っている。

でも、同時に私は酷ひどく恐れていた。世間から「お前達は不誠実だ」と責められる時が来るのではないかと。

その晩、私は明日の仕事が早いこともあり、春海とは別れ自宅に帰った。本当は今晚も春海に抱かれたい気持ちがあったが、そこは我慢だ。果実は熟すほどにより美味しくなる。時には我慢も必要なのだ。

帰宅してポストを開けると珍しく手紙が入っていた。それも私宛のものだ。『キャピタル・テクニカルサービスより』と手紙には記されていた。そんな会社に私は覚えがなかった。

家に入るともちろん中には夫の姿はない。今夜も仕事で帰ってこないのだろう。私は寂しいという感情すら感じることなく、着ていたスーツを脱ぎ、シャワーを浴びた。

それから再び先ほどの手紙を手取る。一体なんなのだろうか。封筒の中身を開けて、最初の一通目を見る。途端とたんに私の記憶は十年前のそれを思い出した。

『十年後のあなたへ、手紙を送ってみませんか？』

そんな企画が今から十年程前、とある企業の手により大々的に行われたのだ。会社創立の記念だかなんだかで、相当予算をかけた企画だったらしい。

その企画に私は応募し、そして偶然対象に選ばれた。なんでも応募総数十万人に対して、選ばれたのはわずか二十人だったらしい。随分と変なところで運を使ってしまったものだ。

さて、十年前の自分からの手紙だ。どんな事を書いたかはもう記憶の彼方に飛んでいる。私は強い興味を持って手紙に目を走らせた。

『十年後の私へ。あなたは今幸せですか？』

いきなりへビーな質問からきたものだ。世間一般から見れば、私は夫から放置され他の男に走る不幸な女なのかもしれない。私は思わず苦笑してしまった。

それから手紙の続きに目を向ける。

『私は今とても不幸です。何故ならずと付き合っていた彼と別れたからです』

そうだ、この頃私は失恋したんだ。それも彼の浮気という形で。それでその悲しみからこんな企画に応募したというわけだ。ちなみに今の夫と出会ったのはこの手紙を送った半年後の事だった。

『だから私はとても不安です。十年後、私はちゃんと幸せになっていくのか。その不安を拭いさるためにもこの手紙を書いています』

当時の私は失恋に余程傷つき、将来に不安を抱えていたのだらう。可哀想な子だ。私は十年前の自分に心から同情してやった。

『十年後の私に一つお願いがあります。私にはあなたにどうしても聞きたい質問があるので。それに答えていただけませんか？』

質問ときたか。十年前からの私の質問にちゃんと答えられるか。少し身構えながら私は次の文を目にした。

『あなたは今、誠実な恋をしていますか？』

その文を読んだ瞬間、私は不意打ちを食らったような気分だった。遂に世間から「お前達は不誠実だ」と責められる時がやってきたのだ。それも十年前の自分から詰問されるという形で。

『もしその答えがイエスであるなら、私は嬉しいです。誠実な恋ほど、素敵なものはありませんから。不誠実な恋は不幸しか招きません』
文を読み進めていくうちに私は嫌な汗をかいていく。胃がキリキリと痛み、顔は苦痛に歪んだ。

『あなたは必ず誠実でとても素敵な恋をしてください。私は十年前からあなたの幸福を祈っています』

その一言で手紙は結ばれていた。

なんて簡素で、そして痛々しい手紙だろう。それが私の感想だった。私は今この手紙によって断罪だんざいされたのだ。自らの不誠実な恋を。

同時に私の中で一つの衝動が生まれた。この手紙に返事を書きたい。

そう思ったのだ。

十年前に手紙を届けるのは不可能だ。それでも私はこの手紙に返事を書きたかった。

私は戸棚から便箋びんせんを取り出すとすぐにペンを手に持った。そして手紙を書き始める。突然やってきたと思ったら不意打ちを食らわしてきた十年前の私に、思い切り一言ぶつけてやるために。

『十年前の私へ。』

今の私はあなたの考える幸福の定義の中では不幸のカテゴリーに属しています。でも心配しないで、別に死にそんな程辛い目にあつてはいないから。

さて、あなたは十年後に私が誠実な恋をしていることを祈っていたようですね。

結論から言いましょう。私が今している恋はとても不誠実です。何故ならそれは不倫や浮気と呼ばれる関係の恋だからです。

あなたの言い分を真に受けるのであれば、不誠実な恋をしている私はとても不幸な存在なのでしょう。だからこそ言わせてください。

お前は何様だ、と。

確かに私と春海の恋は不誠実です。きっと将来的には破滅はめつに向かうことでしょう。

でも私は自分を不幸だとは思っていません。幸せだともあまり大きな声で言えないけれど、少なくとも女として抱かれる喜びを私は知っています。

人にはそれぞれ幸せの形というものがあります。誠実さを大切に
にする人は、清く正しい結婚生活を続けられいいのです。でも私
の幸せの形は違いました。私は世間が不誠実だという愛を選んだ
のです。この愛は茨いばらの道である事を知りながら、それを覚悟し
て。

あなたのした失恋の痛みはよく覚えています。浮気された事実
はとても辛いものでした。しかしだからと言って浮気という存在
そのものを逆恨みして幸せの形を人に押し付けることは、あまり
に身勝手過ぎると思いませんか？

世の中は綺麗事きれいきだけで回っていません。それは汚れた大人とし

ての意見ではなく、甘い恋の味を知った女としての意見です。

だからあなたも早く素敵な恋を知ってください。誠実や不誠実に関係の無い、あなただけのオリジナルの恋を。

それと安心してください。確かに私の恋は不誠実です。でもそれは同時にあなたの望むとても素敵な恋でもありますから』

手紙を書き終えると、私は一つため息をついてその文面を読み返した。なんと自分勝手に非道徳的な内容だろう。これには十年前の私も苦笑すること間違いなしだ。

それから私は十年前の自分から届いた手紙をくしゃくしゃに丸め、そのままゴミ箱に放り投げた。時に過去を振り返ることは大切だけど、過去の想いに縛しばられる事ほど馬鹿馬鹿しいことはない。それが私の持論だからだ。

嫌な気持ちを全て吐き出すと、私はなんだか急に春海に会いたくなくなった。うずうずとした気持ちが止まらなくなり、私は自分が恋をしているのだと改めて認識させられる。

堪らずに私は携帯電話を取り出し、春海の番号にかけた。数回のコール音。電話はすぐに春海に繋がった。

「あ、もしもし私。実は今から会いたいなって。仕事？　そんなの関

係ないよー」

すると電話の向こうから春海の笑い声が聞こえてくる。温かい笑い声だ。

ああ、なんて幸せなんだろう。

この瞬間、私は幸福で素敵な恋を確かに感じていた。

完

『Passage』 (雪月音弥著)

騒々しい店内を通り抜け、自動ドアの前に立つ。開いたドアの向こうでは、シトシトと雨が降っていた。しばらく止みそうにない。

店内に戻ろうかとも考えたが、既に財布の中はすっからかんだった。チツ、と舌打ちして雨の中を歩き出す。

パチンコ屋からアパートまで歩いて十分。冷たい雨は少しずつ体熱を奪^{うば}っていく。吐く息は白い。しかし凍^{こご}えるような寒さが今の自分には似合^あいだと思^{おも}った。

財布の中身だけではなく、腹も減っている。朝から何も食べていなかった。コーヒーと煙草で胃がキリキリと痛む。それも毎度のことだ。平日はバイト先で言われるままに働き、休日はフラフラとパチンコ屋へ行って過ごす。そんな生活が数年続いていた。

特にやりたいこともない。友人もいない。何もかもが面倒で、考えるのも嫌になる。ただ同じことを繰り返すだけの、単調な時間を持て余す。

古びたアパートの階段を上がり、玄関のドアを開けて中に入った。狭い室内には、小さな机と布団、わずかな食器、それにギターケースが一つ置いてあるだけだ。他には家具といえるような物はない。

濡れた服を脱いで、熱いシャワーを浴びた。適当に服を選んで身につけ、頭をタオルで拭きながら床に座り込む。ふと視線を上げると、ギターケースが未練がましく何かを主張していた。

その忌々しさに目をそらし、煙草に火をつける。吐き出した煙をぼんやりと眺めながら、頭に浮かぶのはいつも同じ。

なにかもかも、どうでもいい。

所詮、俺には、手が届かない夢物語なのだから。

自分の未来は明るく、なんでもできる。何にでもなれる。そう思っていた。

バカな友人たちと学校をサボっては海の近くにあった倉庫に籠もり、毎日ギターを弾いていた。時折ライブハウスで派手にパフォーマンスをし、夜遅くまで遊び回った。留年しそうになって、担任に必死で頼み込んだこともある。

プロになりたいと思うようになったのは、俺にとってはおごく自然なことだった。東京の専門学校に行きたいと親に言ったら猛反対をくらった。散々言い争った末に、生活は面倒を見てやるから学費は自力でどうにかしろという話になり、その場の勢いでそれでいい、と返事をした。

現実には、あまりに厳しかった。いつの間にか、専門学校に行くためにバイトをするのではなく、バイトが生活の中心になっていた。金は思うように集まらず、次第に授業を受ける時間は減っていき、やがて

授業にはついていけなくなつて、通うのをやめた。それを知つた親からの送金も止まつた。

それでも実家には帰らず、バイトを転々とした。やはり金は貯まらなかつた。ますます生活は苦しくなつて、それまで暮らしていたアパートから、今の古いアパートへと引越した。処分できる物はほとんど処分したが、ギターだけはどうしてもそういう気にはなれなかつた。それから、何年がたっただろうか。

ギターケースにはうっすらと埃が積もり、手にすることすらやめてしまった。それが目に入るたび、苦い思い出が頭の中を占領し、虚しさが体中を蝕んでいく。深く大きな暗闇に飲み込まれ、考えることから億劫おっくうで。指の先から少しづつ腐くさつていくような気さえした。

あの時、ギターを処分していたら、何か違つていたのだろうか。逃げ帰るように故郷へ戻つていたら、今頃はもう少し呼吸がしやすくなつていたのだろうか。

狭い部屋、低い天井。薄い壁は隣室の住人が発する音を無防備に漏

らし、俺の神経をささくれ立たせる。

こんなはずじゃなかった。

そう思っても、もう遅い。

外れたレールには戻れない。

先へと続く道はあまりに険しく、どこへ向かっているのか、それすらわからずに、トボトボと進むことしかできないのだ。

生きているだけ、息をしているだけということがこんなにも難しいと、あの頃の俺が知っていたなら。

後悔は雨のように心を濡らす。しかし拭き取るためのタオルはない。ただ、濡れて、濡れて、いつかはその雨の冷たさに俺自身が凍え死ぬだろう。

不意に着信音が鳴る。煙草を灰皿に押し付け、携帯電話を手にとって。高校の時のバンド仲間、タカだった。

「よう。久しぶりー」

数年ぶりに聞いたタカの声は、変わらず陽気で、今にも鼻歌を口ず

さむのではないかと思った。

「リヨウ、お前、今、家？」

「うん？　そうだけど」

アパートの前の通路に、誰かの足音が微かに響いている。

「そりゃあちょうど良かった。開けてくれ」

足音は玄関前で止まり、ドアが勢いよくノックされた。

ああ？　と俺は怪訝けげんな声を上げる。ドアの向こうからは、携帯電話

から聞こえていたのと同じ陽気な声。

「おーい、早くー」

急かされるままにドアを開けると、黒いスーツに身を包んだ夕力が立っていた。

「いやー、久しぶりー！　ちよっと上がらせてもらおうわー」

昔の気楽さそのままに、黒い革靴を脱いでズカズカと上がり込んでくる。さっきまで俺が座っていた辺りで部屋の中をさっと見回す。その顔に貼りついてきた陽気さが音もなく消えていく。

「……なんもねーな、この部屋」

「……まあ、一人だしな。ビールでいいか？」

呆けたようにぼかんと部屋を眺めたまま返事がない。タカ？ と呼び掛けると、我に返ったように慌てて振り返った。

「……いや、オレ、仕事だから」

「ふーん？ あとは、水しかないけど」

「……いや、いいよ。すぐ帰るから」

気落ちした様子いぶかのタカを訝しみなながらも、俺は冷蔵庫から缶ビールを取り出し、プルトップを開けた。タカはギターケースを見つめ、軽く溜息ためいきをついた。適当に座ってくれという俺の言葉に、どこか上空で返事をしてその場に座り込んだが、よほどギターケースが気になるのか、目が離せない様子でなかなか話をしようとしな

「……んで？ 今日はどうしたんだ？」

「え？ ああ、うん、ちよっと仕事でな」

「タカは、えーと、どこだっけ？ 通信会社だっけ？」

「キャピタル・テクニカルサービス」

「ああ、それだ。よく入れたよなー、あんな大企業に」

「ちよっとツテがあってな」

へえ、と生返事をする。俺とはずいぶんな差だ。こっちは底辺を這いずり回ってるワープア。タカは大企業の正社員様、か。

「他の連中は？」

「トシは、建築業って言ってたかな？　ダイスケは音楽プロデューサー」

「ダイスケが？　マジで？」

すげえな、と呟いて、ビールに口をつけた。炭酸がノドをシュワシュワと引っ搔いていく。

高校を卒業してたった十年の間に、こんなにも差がつくとは。みんな、俺とそうたいして違わないだろうと勝手に思い込んでいた。……完全に道から外れたのは、俺だけだったのか。

バカバカしい。胸の内から湧き上がってくる虚しさと一緒に、さらにビールを飲み込む。

タカが、これ覚えてるか？　と言って、黒い革靴から大きな封筒を一通取り出した。それには『10 Years Letter』という文字とキャピタル・テクニカルサービスの社名。

「十年後の自分宛に手紙を書いて出すってやつ。高校卒業する時にさ、面白そうだから四人でやろうぜって」

「ああ、そういうえば、そんなことあったなあ……」

どこかの通信会社がやってるとかで、確か、それぞれ好きな写真を封筒に入れて送ったんじゃないかったか。

「あれ、うちの社の宣伝を兼ねた企画でさ。十万人応募して、二十人採用になったんだよ」

「へえ。……それで？」

「それでって……あれ？　連絡なかったか？　お前、選ばれてたんだよ」

開けてみ、と封筒を渡されて、手でビリビリと封を開ける。中には一枚の紙と、茶封筒が一つ。茶封筒にはよく見慣れた自分の汚い字で、

俺の名前、高杉諒が実家の住所と合わせて書かれていた。

「俺も中身は見えないんだけど。お前のやつに、間違いないよな？」

ああ、と俺がうなず頷くのを見て、タカは、もう行くわ、と立ち上がった。

「それ、確かに届けたからな。オレはまだ報告書をまとめないといけなくてさ。社に戻らないと」

「ああ、そうなの？ 大変だな」

まあな、とタカは短く返し、ギターケースを見つめたまま、ぼうつと立っている。

「……タカ？」

「……もう、ギター、やらねえの？」

「ああ……ここ、壁、薄いからさ」

ぎこちなく笑う俺に、タカは、そっか、と呟くように言って、玄関へと歩き出す。心なし、来た時よりどこか力無く、疲れたように見え
た。

「……また連絡するわ。今度、メシでも食いに行こうぜ。みんなで」
適当に相槌あいずちを打つ俺に、タカは昔のような気楽さで、じゃあな、と
手を振り、部屋から出て行った。それを見送って、溜息をこぼす。
憂鬱ゆううつが部屋の中に充満する。ギターケースが目について、チツ、と
舌打ちをした。

みんなでメシ？ 誰が行くか。そんな金はないし、自分が惨めみじにな
るだけだ。

茶封筒に目を遣やった。現実を知らない、バカなガキだった俺が送っ
た封筒。その中に詰まっているのは、青臭い夢やら希望やらよくわか
らない、くだらないゴミみたいなものだろう。

忌々しい。

乱暴に封を開けて上下を逆さにすると、中身がするりと滑り落ちて
きた。覚えていたとおり、写真だ。

高校最後の文化祭。先生に頼み込んで許可してもらったライブステー
ジの写真だった。

体育館のショボいライトを受けて、汗だくになりながらギターを弾いている俺。目に力強い光が宿っているように見える。口の端に笑みを浮かべて。

遠い昔のことだ。自分のさほど長くない人生の中で、一番楽しかった頃の。

今の俺には、その思い出さえ虚しい。

ダメだ、見ていられない。写真を裏返して、缶ビールを一気にノドへ流し込んだ。大きく息をつく。

俯うつむいた視線の先には、写真の裏側。白い面に黒い文字が走り書きしてあった。

『死んで腐った魚みたいな目、すんなよ』

それは、高校生の俺がいきがってよく使っていた言葉だった。朝夕の満員電車でよく見る、疲れきったオッサンやOL。

先生の言うことを聞くのが何より大事だとばかりに、いい子ちゃんぶってる同級生。

みんな生氣がなくて、死んで腐った魚みたいな目をしていた。

そういうやつらを軽蔑^{けいべつ}していた。好きなことを好きなようにやればいいじゃん、と。つまらないオトナになるくらいなら、面白おかしく生きればいい。

それが今ではどうだ。

目だけじゃない。

俺自身が、死んで腐った魚そのものだ。

かろうじて生きているだけで、軽蔑していた連中なんかよりよほど価値がない。

「……は、はは」

微かに乾いた笑い声が漏れる。

どうしてこうなったんだろう。

なんでもできる、何にでもなれる。そう思っていた俺の未来は、な

んにもできない、底辺を這いつくばって、単調なつまらない生活を送るだけのオトナ。蔑^{さげす}み、バカにし、嫌っていたはずの。

「……くそつたれ！」

まだ中身が残っている缶ビールをギターケースの方へ投げつけた。方向が狂ってギターケースの右側の壁にぶち当たったそれは、鈍い音を立てて床に落ち、ビールを撒^まき散らす。

ギターケースは未練がましく俺を見つめている。いや、未練がましいのは俺だ。他の物は処分したのに、ギターだけは処分できなかった。弾きもしないのに。無理だ、あきらめよう、そう思いながら、いつまでも夢を捨てきれずにズルズルと。

……もういい。

何もかも、捨てよう。

外れたレールにはもう戻れないのなら。

ここにいることに、何の意味もない。

——故郷に、帰ろう。

そう決意した時、再び携帯電話が鳴った。タカだった。

「リョウ？　ごめん、用事ってわけじゃないんだけど、なんとなく、
気になって」

相槌を打つ気力もない。頭の中はぼんやりとされていて、何も考えられない。

「……おい？　聞いてるか？」

どこかイライラしたような、焦ったようなタカの声。

「なあ、リョウ、ギター、やめないよな？」

ピクリと指先に震えが走る。携帯電話を持つ手に力が入る。

「オレ、リョウのギター、好きだよ。お前が東京に行くって言うから、
オレもついていったんだ。一緒にやりたかったからさ。トシもダイス
ケもそうなんだぜ」

タカはまくし立てるようにそう言った。俺はただ黙って聞いている
しかなかった。何も言葉が思い浮かばない。

「オレたち、みんな、進む道は違っちゃったけどさ、今でもお前とバ

ンド、やりたいと思ってる。だからさ、ギター、やめんなよ」

視界が歪む。黒いギターケースが涙に滲んで形を失っていく。

「……俺、実家に帰るわ」

ポツリとこぼした言葉に、タカは言葉を失ったように黙り込み、やがて、そっか、と静かに答えた。気を取り直したように明るい陽気な声が続く。

「……オレたち三人とも、毎年、年末年始だけは実家に帰ることにしてるんだ。あの時の倉庫を借りてさ、その時だけバンド組んで。リョウも来いよ。一緒にセッション、しようぜ。昔みたいにさ」

空っぽの心に、雨がシトシトと降っている。それは俺の心を濡らし、体を凍てつかせる。

昔みたいに、なんて、もうできない。

そう、わかっているはずなのに。

「……ああ、わかった」

無意識のうちに、俺の口から声が漏れた。

「絶対だぞ。約束だからな」

「……ああ、約束だ」

苦笑混じりに俺が答えると、じやあな、と夕方は言っ、電話が切れた。

黒いギターケースは歪んだ視界の中でいつまでも何かを訴え続けていて。

俺はそれに応じようと、恐る恐る手を伸ばした。

『空を見上げる』

(宇瑠璃春花著)

2003年11月某日

「10年後の自分に手紙を書く？」

トシアキはミカに聞き返した。

トシアキが点滴てんてきをしながら病院のでこぼこ中庭を散歩しているので、点滴スタンドがカチャカチャゴロゴロ鳴る。

トシアキは自分で時々点滴スタンドを器用に持ち上げ、ミカが歩きやすいようにしてくれる。トシアキはいつもこんなヤツだ。

「うん、テレビで募集ぼしゆうしているのを観たの。書いたら10年後に届けてくれるんだって！ふたりで一緒いっしょに書かない？10年後も一緒なんだから一緒に書こうよ」

ミカは声のトーンをあげて腰の重いトシアキを説得しようとして試みた。ミカの声に驚き、庭の鳥がチチチ……と鳴いて飛び立つのを眺ながめつつ、トシアキはちよつと空を見上げて考え込んでいる。

背の低いミカには、いつもこういう時のトシアキの顔が、見えない。見えるのは、トシアキの胸元。マフラーと病衣の隙間すきまから見える、点滴の管を固定する白いテープ。

「じゃあさ」というトシアキのことばにミカはトシアキの顔を見上げる。

「俺は字が下手だから、おまえが書いてくれるなら、いいよ」
ミカはうれしくて、トシアキの左手を握にぎった。

トシアキの手、寒くなっていた。

翌々日、病棟の休憩所きゅうけいで、ふたりは『10年後の自分への手紙』を書くことにした。

休憩所には数カ所椅子いすとテーブルがあり、テレビでは時代劇が放映され、白髪の男性がその前に座っていた。トシアキと同じく茶色いカバーをかけた大きな袋と、真っ白い小さな点滴をつけていた。とても眠そうにテレビを眺めていた。

窓からは、隣接する病棟の灰色の壁が見えた。

ミカは鞆から魔法瓶とカップをとりだすと、トシアキと自分に温かいほうじ茶をいれて、それから買ってきた便せんと封筒をテーブルに広げた。

「では、一緒に書いていきましょう。トシアキは10年後の自分へ何を書きたい？」

トシアキはほうじ茶をすすりつつ「うーん……元気でいればそれでいいよ」とあっさり言った。

「それだけ？」

「うん、それだけ」

ミカは拍子ひょうし抜けして「えええ。もっと、こんなことしたいとか、どこか行きたいとか……」とおでこの髪をかきあげた。

トシアキはちよつと笑って「ああ、おまえも元気で、笑顔で、一番いいのは、もうちよつとほっぺの肉が胸に引っ越したらいいと思う。そしたら海でビキニでポロリで、楽しいぞ？ピチピチ27歳。いや、おばさんか？残念……」と言いつつ、左の眉を上げて『いじわるな顔』

をした。トシアキがミカをからかうときの顔だ。

ミカはほっぺを今年最大にふくらませて抗議こうぎの表情をした。ミカの威嚇いかくの顔だ。

ふたりでぎゃあぎゃあ言い合いしそうになるが、通りがかりの看護婦に『静かに！』というジェスチャーをされ、ふたりもぺこりと頭を下げて言うとおりにした。

病棟は静かで、時代劇の台詞と、たまに医師を呼び出すアナウンスがある以外は若いふたりの声が目立ってしまう。

「ううう……。わかったわ。ひとまず今までの発言を全部、この手紙に書きます……」

と、ふくれっ面のミカは、ぶつぶつ言いながら、パステルピンクの便せんにおしゃべりの内容を書き込んでいった。

トシアキは、窓の外を眺ながめてあくびをしている。

時代劇を眺めている男性が、ちらりと、トシアキを見て、また、テレビに視線を戻した。

完成した手紙は、ミカの予定と大幅に変わってしまった。ひとまず、封をしてトシアキと病院正面玄関のポストに投函とうかんした。

「じゃあ、明後日、また夕方に来るね」とミカはトシアキに手を振って、そのまま帰ることにした。

病院の門を出るときに、ミカは毎回、ちよつと玄関の方向に振り返るのだが、今日もトシアキは背を向けて裏庭の方を眺め、頭をぼりぼりかいていた。

点滴の茶色い袋が、冬の風でゆらゆら揺れていた。

それが、起きているトシアキを見た最期の思い出になった。

2014年8月某日

ミカは海水浴場に面した駐車場にカブを停め、午後の日差しの強さがやっと弱まってきた青い海を眺めた。

浜辺には数組の海水浴客が思い思いに楽しんでいた。

ミカはヘルメットを脱ぎ、日に焼けた茶色いショートヘアを風になびかせ、近くの売店に入っていた。

その売店には休憩用の席があり、運良く空いていて座ることができた。

売店のおばちゃんがミカに「注文は壁に書いてあるよ。おすすめはところてんだよ」と威勢いせいよく声をかけた。ミカはそれを頼んだ。

「あれ、お姉さん。単車ごとここに来たの？」

「そうなんですよ。フェリーで愛車と乗ってきました。こいつとふたり旅なんです」

「へえ。バイク好きなんだね。どこ見てまわるの？」

「はい。ひとまずこの島を一周しようと思って」

ミカは満面の笑みで麦茶を飲み干し、おばちゃんと雑談しつつ、ところてんを平らげた。

店を出ると、相変わらず明るい空と海が広がる。

ミカは、停めているカブに戻り、深呼吸した。

リュックからパステルピンクの封筒を取り出し、しばらく見つめて、静かに開封した。

便せん3枚には、あの時の思い出が、筆跡ひっせきと共にしっかり残っていた。

涙が、日焼けした頬を伝う。

思わず、空を仰ぐ。

あの時のトシアキと、一緒だ。

でも、今見上げる空は果てしなく、青い。

鼻水も垂れてきて、なんだか笑ってしまった。

海に入る前に口の中がしょっぱい。

笑える。

やっと、手紙を読めて、よかった。

涙が出て、よかった。

ごめんね

ありがとう

私、生きるよ。

手紙は丁寧ていねいに畳たたんで封筒に戻し、防水ポーチにしまった。

「よし！せっかく南の島に来たんだ！泳ぐわよ！海でビキニでポロリよ！」

通りががりのおじさんがビツクリするほど大きな声で宣言すると、ミカは全速力で浜辺に向かった。

夏は、まだまだ続く。

遠くの空で、白い鳥が悠々と飛んでいる。

風はミカを、優しく包む。

(2013. 10. 20 ururi*haruka)

あとがき及び著者紹介

宇^う瑠^る璃^り 春^は花^るか

(『手紙よりも』『空を見上げて』『あなたに手紙を』)

著者略歴..

インディゴチルドレンとして地球にやってきて、アホな学生やおっちょこちよい看護師やいろいろやる。

不思議大好きライトワーカーなのだが、中二病末期なため創作オタクとして世界に光をもたらす俺。表現方法は童話、手描き絵、CG画、詩、絵本、工芸、手芸、市民マラソン参加など、二次元も三次元もツールにこだわらずに表現することになっている。

すべてが私の【物語】だぜよ。イラストではururi*haruka♡♡♡そり名乗る。

まずは創る！技術や肩書きは後から付いてこい！

俺の宇宙は千次元も超えるぜ！俺が道だ！なんくるないさ☆

作者よりひとこと…

かーるさんにはいつもお世話になり感謝です。お誘いくださりありがとうございます。

ここに至るまでの、まわりのあらゆるすべてに感謝申し上げます。

流民（『過去からの告発』）

著者略歴…

太陽系第三惑星産まれ。ようやく書き始めて三年目に突入のバリバリ若手（？）です。そんな奴です。

作者よりひとこと…

特に後書と言う物でもありませんが…最近SF脳になっていて、久しぶりにこういった文章を書きました。

元の間人といれ変わってしまった人に手紙を送り届ける。ほかの方の作品では本人に手紙を渡す事に成功していませんが、唯一こ

の文章だけは手紙を本人に渡す事を失敗させてしまいました。

特にそれを意図して書いたわけではないですが、入れ替わった人間が10年前からの『自分』の手紙に『自分』で無い事をばらされる、そんな物語を書いてみたくなりこんな感じの文章に仕上がりました。

お読み頂いた方、本当にありがとうございます。

海見みみみ

(『不誠実で素敵な恋』 『その手紙は読まないで！』 魔皇帝十年前からの刺客く)

著者略歴..

1987年8月生まれ。

高校生まで順調に人生を送るが、大学生になって中二病を発症。『あなた方はパブロフの犬だ！』と筋肉少女帯の影響丸出しの言葉を残し大学を半年で去る。

その後数年失踪し、昨年に入ってから突如インターネット上で『海見みみみ』として活動を始める。一部ではその作風と名前から「実は女性なのでは？」との声もあるが、その正体は正真正銘の男性。

ただし周りからメンタルは女々しいと言われているような、言われてないような。

作者よりひとこと…

はじめましての皆様はじめまして。そうではない方はおはこんばんちはございます。海見みみみでございます。この度は『不誠実で素敵な恋』と『その手紙は読まないで！』魔皇帝十年前からの刺客の二作をご覧頂きありがとうございます。

今回は二作とも私らしい企画の空気を読まない作風になりました。特に『不誠実で素敵な恋』は苦情が大量にくるのではないかとガクガク震えております。それでもこうやって作品として書き上げ、世に出す辺り私は根っからの確信犯なのでしょうね。まっ

たく困ったものです。

今回の企画はかーるさんの主導で進められました。見事企画をやり遂げたかーるさんには心からの拍手と感謝を。

それと普段から私の創作活動を応援してくださる多くの方に、この場を借りて御礼申し上げます。皆様いつも応援ありがとうございます！

以上、海見みみみでしたー。

雪月音弥

(『Passage』)

著者略歴..

兵庫県在住。mixiではotoyaというハンドルネームHNで活動中。

作者よりひとこと..

雪月音弥と申します。読んでくださり、ありがとうございます。

この作品が、これまで皆様自身が歩んできた道を振り返り、これから皆様が進もうとしている道を改めて考えるための通過点に

なることができたなら幸いです。

そして、10年後の私へ。

無理してないですか？ 今、楽しいですか？

葉月たまの

（『危ない、振り返っちゃ駄目！』）

著者略歴..

アニメと読書とTRPGとプレイバイウエブPBWとスポーツと文書系の創作、さらには麻雀と囲碁とネットゲを嗜む、腐女子である（最近パワーが落ち気味）。

創作ジャンルはファンタジーやラブコメ、TRPGのリプレイなど。

ピクシブpixiv、mixiなどのSNSや各種PBWで遭遇する可能性が高い。

へくとばすかる（『そして10年が過ぎた』）

著者略歴…

某年忘月忙日生まれ。

創作を始めたのが中二のとき。まさにそのものズバリです（笑）
詩のような小説を書きたいと思いつつ、のんびりと創作（まがい？）を続けています。

作者よりひとこと…

10年後へ手紙を託す話ではなく、受け取る話にする、という条件のもと、生まれた作品がこれでした。

手紙を受け取る本人は背景にかすんでしまい、自分でも想定していなかった人物が表に出ることになりました。

これも話が自動的に進んだ、あるいは「ひとり歩き」した例になるかもしれません。

檜崎 六呂（『ノート』『コイ×ソラ』）

著者略歴..

1973年2月生まれ。HN『かーる』として、Mixiのコミュニティ『創作が好きだよ！』にて副管理人を務める。

執筆作品に、『私的国語辞典』『リトライ』『ゾンビパウダー』などがある。

プロレスはミーハー的に大好き。詰問と無視に弱い。

作者よりひとこと..

ども、企画立案者のかーること、檜崎 六呂です。今回はドストレートな作品『ノート』と初のガチなミステリーもの『コイ×ソラ』を投入させてもらいましたが、やはりどちらもまだまだ稚拙で、お恥ずかしい限りでした。それでも少しは楽しめると思いますが、ぜひ読んでやってくださいまし。

そして、今回の企画にご参加下さった皆さん。

素敵な作品を本当にありがとうございました。

そして、ここまで読んでくださった皆さん。

拙い編集技術ですが、何とか形になりました。

今後もこのような書籍化を進めていく予定です、コミュニケーション
テイともども、応援していただければ幸いです。



コミュニティ紹介
Mixiコミュニティ『創作が好き!』

創作が好き、何かを作るのが大好きなひと、
いらっしやいませ。

文芸文学、SFやファンタジー、詩や川柳。
絵画やイラスト、立体作品、
写真やインスタレーション。
音楽や歌詞。ケーキやお料理まで、
なんでも歓迎。
とにかく「創る」人のための
コミュニティを支援し、
その情熱を応援します。

(コミュニティスペック)
開設日 : 2012年02月20日
管理人 : しちみ黒猫
副管理人 : かる
カテゴリ : 趣味
参加条件と公開 :
レベルだれでも参加できる(公開)
トピックの作成権限 :
参加者が作成できる

コミュニティurl :
http://mixi.jp/view_community.pl?id=5922574

Mixiコミュニティ
『創作が好きだよ!』編集

作品集
『10 Years Letter ~10年後の君へ~』

編者 橋崎 六呂
2013年12月10日 第一刷発行

なお、本紙に掲載された著作物は、
それぞれの著作者に著作権を有します。